

外陣講義文書

「第1講義文書」
(0 = 0 プロベイショナー)

第11章

魔術的意識

- | | |
|------------|-----------|
| 1 | 意識と無意識の境界 |
| 2 | アルテル・エゴ |
| 3 | 感じる知性 |
| 4 | 内在秩序 |
| 5 | シャーマンの方法論 |
| 6 | 魔術的意識への変容 |
| 7 | 境界の住人 |
| 8 | 守護者との対話 |
| 9 | メルカバによる下降 |
| 瞑想課題：神への祈り | |

THE OFFICIAL ORGAN
OF
I::O::S::

PUBLICATION IN CLASSES C~D
IMPRIMATUR: M FRATER I::O::S::

First published in 1986 by I::O::S:: private edition (ver.1).

Second published in 1998 by Sekibunsha (ver.4).

Third published in 2005 online versions by I::O::S:: (ver.5).

This Edition Fourth, Revised and Expanded in 2013 (ver.6).

All rights reserved. © Tzutom Akibba 1986, 1998, 2005 and 2013

知識講座

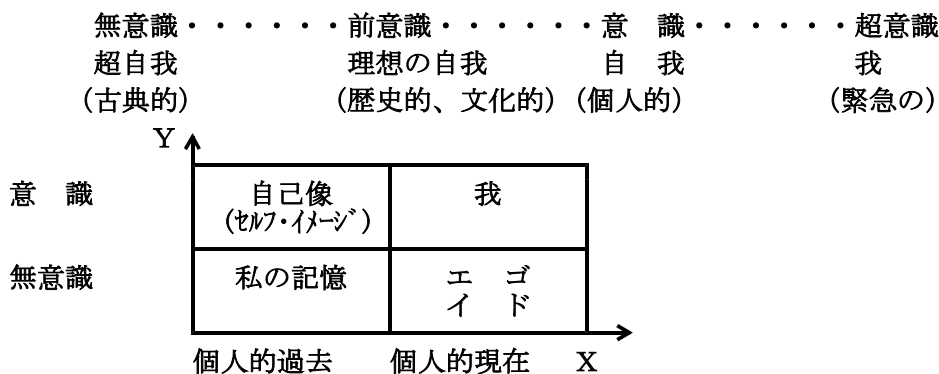
1 意識と無意識の境界

意識／無意識という用語を用いると、読者は反射的にユング派心理学という名の神秘宇宙に引き入れられてしまうだろう。それほど、魔術関係者の間ではユングの影響が大きい。しかし、本格的に無意識の問題に立ち向かったのは、フロイトの方が先である。ここで、ユングの師匠であり友人でもあったフロイト師とユング老の考え方の違いを少し整理しておいた方が良いでしょう。フロイトの心理学では人間の精神を三つのサブシステムに分解する。

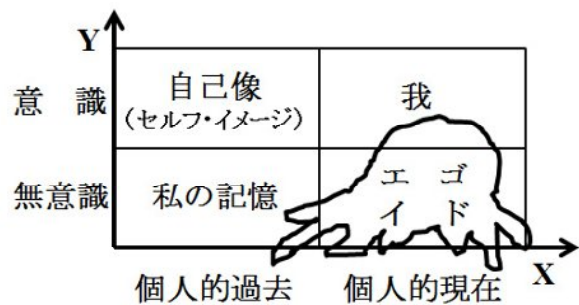
超自我：自我から発生する自我の審判者、検閲者
 自我：イドから発生する外部と接触する魂の領域、アイデンティティー
 イド：個性を形成する核となる無形・未組織のエネルギー

ダニエル・ローレンス・オキーフの研究、『盗まれた稲妻』によると、この状況は次のグラフにうごめくアメーバ状の領域として認識することができる。⁽¹⁾

横軸（X）は生物学的時間（個人の誕生から死までの）であり、縦軸（Y）は意識の顕在度である。つまり、全意識は、次のように領域区分されている。



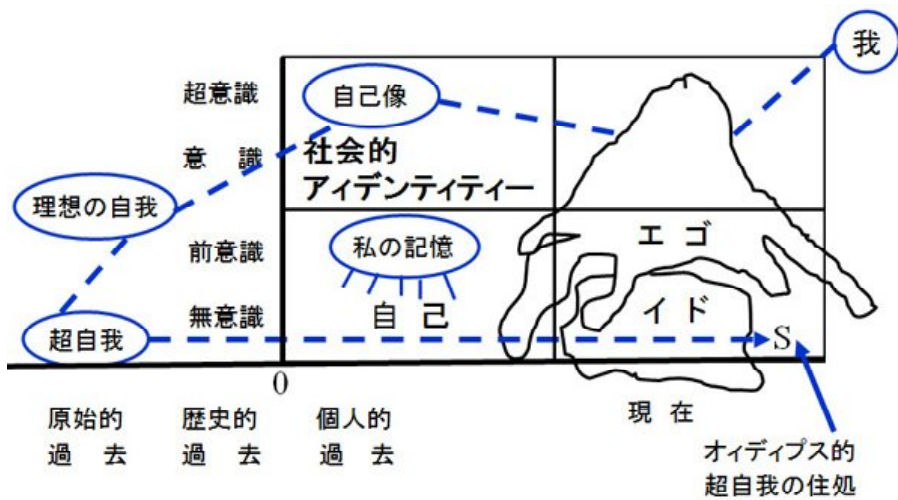
この奇妙な図形の中に四区分された「わたし」たちは、すべて「全体としての自我」を構成する要素である。しかも、ややこしいことに最もわれわれに身近な「エゴ」はアメーバ状にうごめく触手を無意識の領域に伸ばしている。その触手の幾分かは、一個の人間としての粹さえはみ出し、集合的無意識（フロイトは認めなかったが）まで浸食している。



フロイトは人間の心のなかに普段は意識されない情動の流れを発見して、これをリビドーと呼んだ。かれの場合、リビドーは無意識から意識へ一方的に流れる心的エネルギーであり、この図では蛸が触手から吸い上げているのがリビドーである。（ユングはリビドーの流れは可逆、つまり意識から無意識に流れることもあると考えた。）

(1) Daniel Lawrence O'Keefe, *Stolen lightning : The Social Theory of Magic*, New York : Vintage Books, 1983, pp.287-292. (叢書ユニベルシタスの訳とは異なる。訳語は秋端による。)

ともあれ、この図式の時間軸を強調して、エゴの機能を図解したのが下図である。



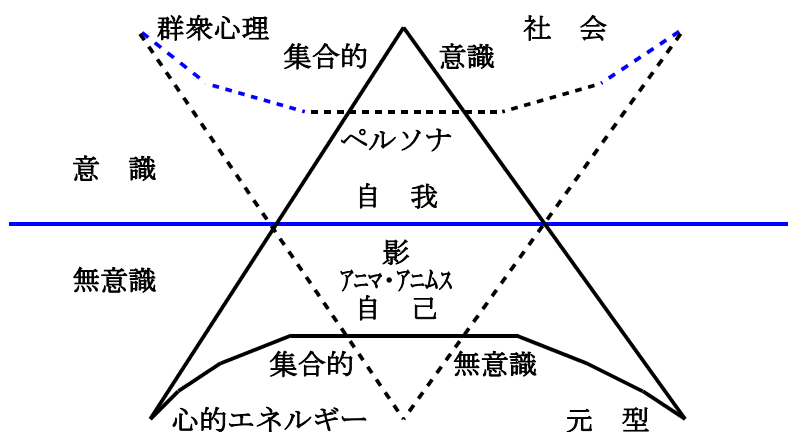
この図の中でもイドは意識のラインに到達しない。そして、意識的自我の中心たるエゴ（タコチュー）は食欲にイドから心的エネルギーを吸い拡大していく。

さて、この生々しい図式も一面の真実を表している。

もう一方のユングの分類も四角い図表を持ち出すことになる。かれ自身は明確な区分をした訳ではないが、人間の精神を区分すると次のようになる。

意識	集合的意識	個人的意識
無意識	集合的無意識	個人的無意識
	脱個人的	個人的

しかし、その関係は下図のように階層的に描かれた方がより真実味を帯びてくる。



2 アルテル・エゴ

(1) 多層化したコミュニケーション

我々が他人に意志を伝えようとするとき、或いは意識的にせよ、無意識にせよ、何らかの影響を他人に与え、或いは受け取りつつあるとき、その個人と個人の間には、何らかのコミュニケーションが働いている。

人間は有史前から様々なコミュニケーション手段を発達させてきたが、対面して行う手段は、次の2つの方法に集約される。

- 言語によるコミュニケーション (Verbal Communication)
- 非言語的、前言語的、又はメタ言語コミュニケーション (Non-verbal, Pre-verbal or Meta-verbal Communication)

前者については解説する必要はないだろう。音声言語(会話)、文字言語(筆談、PC通信)、記号言語(手話、手旗信号、発光信号)など、さまざまな言語によるコミュニケーションを人間は発展させてきた。

しかし、後者については学習すると言うよりも、肌で感じる性質のものである。

一説によると会話の65%が非言語的なやりとりで、残り35%が言語的なやりとりであると言う。それほど、非言語的なコミュニケーションは大切である。⁽²⁾

しかも、非言語的な表現は、声の口調、表情、動作の緩急、発汗、視線等々のシグナルをホリスティックに受信する。従って、高度な演技の訓練を積んだ舞台俳優でもなければメタ言語で嘘をつくことは不可能である。

例えば、粗相をした幼児の前で、母親が全身の怒りを堪えきれない様子で「おかあさんは怒っていないのよ。」と言いながら後片づけをする場合、子どもは「母親は怒っていない」という言語による情報と、「母親は非常に怒っている」というメタ言語による情報を同時に受けることになる。この場合、言語とメタ言語が全く正反対の情報を伝えており、ダブル・シグナルを示す。もちろん、メタ言語の情報の方が正しいのは言うまでもない。これがより微妙になると、嫌いな同僚に対して口振りや顔は好意的に話していても、身体が横を向いて話している日常会話、手先の無意識な動きなどのダブル・シグナルを示す場合がある。心中にストレスを溜め込まないためには、このふたつの言語が一致しているのが理想である。もし、意識せずに正反対の言語を操っていたら、どこかで修正する必要がある。

これらは、いずれも五感による接触を前提としているが、トランス・パーソナルなコミュニケーションという事象もある。つまり、遠隔地から他人の意識あるいは肉体に直接情報を伝達することである。魔術は殆どこの経路で作用する。そして、前者の分類を借りれば、トランス・パーソナルなコミュニケーションは、基本的に前言語的/メタ言語的イメージを伝達するものである。巨大な猫が出現したり、言い知れぬ恐怖感とともに窓に緑色の粘液が現れたりするのは、魔術的イメージが喚起された例である。むしろ、テレパシー的な準・言語的情報(完全な音声言語が伝達されることは希である。象徴化した文字の方が受け取り易い。)がない訳ではない。しかし、それもエンパシー(情緒伝送)と結びついており、混沌とした夢を受け取るようなものである。

また、これらの魔術的回路が構成されたときは、術者は脳の前言語的機能を主に使用しているので、言語的送信が困難だという事情もある。第7章のイメージの解釈で述べたように、イメージの喚起と創造は、それについて考えようとするとき消えてしまう。思考は言語/論理の機能であり、前言語/情緒の機能であるイメージとは相いれないのだ。

(2) 國分康孝『カウンセリング・マインド』生産性出版、1989年、45、46頁。

誤解を恐れずに言うならば、右脳的な仕事をしているとき、左脳が言葉でそれを解説しようとしてもうまくいかないのである。

(2) 伝統的な心の状態

古来、賢者たちはトランス状態を巧みに利用してきた。

テウルギアの実践者たちは、イウックスを廻す技法を活用してトランス状態に入った。イアンブリコス、プロクロスしかりである。魔術的技法を拒否したプロティノスさえ5年間に4回、恍惚状態に入り神人合一体験を得たことを弟子のポルピュリオスが言及している。⁽³⁾

ユダヤ教律法解釈の古典的著書『シュルハン・アルーフ』と『ベート・ヨセフ』を著したヨセフ・カロ（1488-1575）は、同時にカバラ修行者でもあった。⁽⁴⁾

かれは約50年間にわたる天界の霊的指導者マギド (מַגִּיד) と交信した記録『マギド・メシャリム』を書き記しており、そのなかでトランス状態に入り異言を語ったと告白している。スペイン大追放後のユダヤ社会は、以後、異言をマギド（天の言葉を取り次ぐ者）と呼んだ。⁽⁵⁾

このマギドを得ることは特別の意味を有していたようだ。ヨセフ・カロは肉体的、精神的な準備についても言及している。⁽⁶⁾ カロがマギドの指示により参加したサフェドのカバラ研究会の影響下にあるカバラ修行者は、さまざまな形でマギドの示唆を受けた。⁽⁷⁾



(3) 変成意識状態

人間の意識状態は、状況によるが階層的な構造をもち、この階層間には様々な経路が走っている。前項では、意識と無意識の二つに明確に切り離れたのが、その境界には連続した階層が存在する。この階層を、ニューエイジ系の者は変成意識（ASC: Altered State of Consciousness）、マイケル・ハーナーは、やや意味あいが異なるが、シャーマン意識（SSC: Shamanic State of Consciousness）、カスタネダはナワール、パラケルススは、アクアステル、つまり、水性のイリアステルと呼んだ。ある意味では、日常的リアリティと夢のリアリティを結ぶ境界のリアリティとも言える。

われわれは「第2の自己」という意味のラテン語で、これをアルテル・エゴ（Arter Ego）と呼ぶことにしよう。

ASCの代わりにアルテル・エゴという単語を用いたのは、単なる精神医学用語や、ニューエイジ用語ではないことを強調するためだ。それは脳の一部が形作る意識のフィルターのひとつではなく、社会生活を行うありふれた名前をついた昼間の人格（しばしば、通常意識とか普遍意識と誤って呼ばれる。）と全く対等の、しばしば、その上位に立つ、力のある無名の（秘密の名前を持つ）人格である。

人間の人格はひとつに固定されたものではなく、普通、幾つかの平行した位相を持っている。ひとりの人間が、忍耐強く抑制の取れた大人の態度と、我侷で子ども地味な性格、無鉄砲な衝動的冒険者の気質など相反した「顔」を見せるのは、かれが演技をしている訳でなく、かれの内部にその数だけの「人格」が存在するからだ。われわれは肉体とその胸に留められた戸籍上の名前

(3) ポルピュリオス「プロティノス伝」『プロティノス ポルピュリオス プロクロス』中央公論社、1980年、116頁。

(4) Lawrence Fine, *Safed Spirituality: rules of Mystical Piety, The Beginning of Wisdom*, Mahwar: Paulis Press, new edition no date, original 1984, pp.54 f.

(5) エドワード・ホフマン『カバラー心理学』人文書院、2006年、43-44頁。

(6) Lawrence Fine, op. cit., pp.55-57.

(7) Matt Godish, *The Sabbatean Prophets*, Harvard: harvard University Press, 2004, pp.67f.

(社会生活のための記号)に幻惑され、かれの内部に幾つかの人格が複合して存在することに気づかない。

ユング派の新進学者ジーン・シノダ・ポーレン博士は、その2部作品『女はみんな女神』及び『男はみんな男神』で西欧人には馴染み深い神話大系、ギリシャ神話の女神と男神の元型、人格モデル、または自己イメージがあることを主張した。

女神元型は、ヘスティア、デメテル、ヘラ、アルテミス、アテナ、アフロディテの6柱であり、男神元型は、ゼウス、ポセイドン、ハデス、アポロ、ヘルメス、アレス、ヘファイトス、ディオニュソスの8柱で表現されている。

彼女は臨床医学者なので、具体的な症例をあげて女神や男神の優勢な人格を列挙している。ここでは彼女の研究内容を語るのが本質ではないので、軽く言及するにとどめるが、女性運動家タイプの処女神アルテミス(残酷な森の乙女)の生き方や、良妻(依存型妻)としてのヘスティア、妻としてのヘラ、母としてのデメテルの分析などは非常に面白い。男神の分類の方は女神ほどじっくりいれないが、2冊とも一読をお勧めする。

そう人間の心は迷宮であり、そこに住む者もひとりではないのである。

(4) 第2の自我

アルテル・エゴは、あなたの魔術的人格が成長するためには避けてとおれない人格である。そして、多くの魔術はこの人格が送受信する覚醒夢として存在する。

普通に生きている昼間の人格は、特別な場合以外、このアルテル・エゴに気づかない。その特別な場合とは、夢、白昼夢、薬物/飲酒による陶酔、デルヴィッシュ・ダンス等の特殊な祈禱、幻覚、幻想、臨死体験、霊媒の恍惚状態、シャーマンの意識などである。

この人格を意図的に表出させる技法は様々だが、断食、瞑想、長期間の不眠、極度の寒冷、全身の固縛(インディアンの繭、全身ギプスなど)、低血糖、高熱、詠唱、催眠、バイオ・フィードバック、感覚遮断タンクなどが一般的である。インドネシアのマジック・マッシュルームやメソ・アメリカナのペヨーテなどは効果が不確実で、自己制御がきかない。

これらは殆どが外的、内的な理由で意識水準の低下が起こっているときである。病気や薬物によるものは実験する訳にはいかないが、その幾つかは検証が可能である。

我々の日常生活で最も身近なものは夢であろう。しかし、夢を活用するためには、完全に眠ってしまった状態は対象外である。自分は起きている(或いは夢を見ている)という自覚があり、しかも、夢が見えている状態、入眠時/出眠時のわずかな状態か、特殊で鮮明な夢、覚醒夢(Lucid Dream)が対象となる。



左図は、一般的な自我「明光の自我」(EGO LUCIS)と、図には現れていないが、集合的無意識の大海である「われらが海」(MARE NOSTRUM)の上に浮かぶ個人的無意識の自我「影の自我」(EGO UMBRA)に挟まれて存在する「境界の自我」(ARTER EGO)を示す。

さて、「思惟的存在者」(RES COGITATIUS)である人間の思惟は、外界と交渉する「語られた思惟」(COGITATIO VERBO)と、極限状態において自己の内部に生じる「沈黙の思惟」(COGITATIO SILENTIO)に分かれる。

その両者を媒介する精神状態を名付けるならば、「調停の思惟」(COGITATIO MEDIA)とでもなろうか。

そして、上図では「影の自我」は円形の境界線を持つが、実際にはこの境界線は「種族的無意識」と「集合的無意識」とのなかに埋没している。そして、人間の集合的無意識は、より広い進化樹の意識領域に、さらに全ての生命の意識に繋がるリンクを形成しているのである。

次項で語るが、このリンクはわれわれの視野のなかにある有機物だけでなく、宇宙のすべての実在を含有する。

3 感じる知性

(1) 人間の全体像の把握

古来、教育は「知育」、「徳育」及び「体育」からなるとされた。しかし、近年、この三つの育成に加え「情の教育」の重要性がクローズアップされている。

「情」とは、情操であり、感情の豊かさだ。これを加えて「徳・知・情・体」の教育を唱えたのは、戦前の陸軍士官学校のプレパトリー・スクールに該当する陸軍幼年学校である。つまり、(軍の) 中学校教育である。そこでは、この四者のバランスの取れた教育が重視された。今はあまりにも「知」に偏重する世界なので、忘れがちであるが、旧世代の教育では、これはあたりまえのことだった。

古代ギリシャの有名な哲学者ソクラテスはどのように死んだか？ 国法違反を問われ死刑を宣告されたソクラテスは、友人の手引きにより牢から脱出することもできたが、「悪法といえど法なり。」と主張し、自ら毒杯を呷った。かれは「徳」を自らの生命よりも優先した。

古典古代では古すぎると言うならば、日本の戦国時代ではどうか。まだ、『葉隠』や武士道などという面倒なものはない。当時の武将たちは、自分の思うがままに戦った。しかし、そこにも独特の美意識がある。それは「義理の死はせねど、情の死はする。」というものだ。主君に「義理だて」して死にはしない。旗色が悪ければさっさと逃げ出す。しかし、「情」に絡んで友のためなら死ぬというものだ。

「知」と「体」については省略しよう。それらは常に重視された。しかし、絶対視された訳でもない。

このように古い時代では、「徳・知・情・体」がそれぞれ大切だった。しかし、最近になって「知」のみが突出して重要視されてきた。

その悪弊が生まれたのは、それほど昔の話ではない。第1次世界大戦中に、米国のスタンフォード大学で知能検査の方法が開発された。スタンフォード・ビネー方式の知能テストにより、米国人二百万人を検査し、その平均値を100として人間の「頭の良さ」を分類した。

つまり、指数が100より良ければ「頭が良い」、それ以下なら「頭が悪い」という単純化である。この指数をIQ (Intelligence Quotient) とする。諸君もIQテストを受けたことがあるだろうか？

しかし、このIQテストで判るのは、人間の「数学的演算能力」と「論理的推論能力」だけである。人間の出来、不出来が、「考える力」だけで図られて良いのか？ 豊かな「情」や、正邪を判断する「徳」はどこに行ったのか？

残念ながら20世紀後半の約半世紀にわたり、教育界においてはIQ万能主義が横行した。そして、日本においては、それに拍車をかけたのが「受験勉強」である。

本来ならば、中学、高校において、人間として大切な情操を磨く音楽、美術や、徳育を図る倫理、道徳が重視されても良いはずだった。しかし、すべては「受験」のために削ぎ取られ、成長期の肉体に死活的な体育さえも等閑視された。そして、多くの時間を奇形的な「受験勉強」に費やしてきたのである。

誰もが実感できると思うが「受験勉強」は学問ではない。それは単なる記憶と演算のトレーニングだ。それは真の意味で「考えること」から、かけ離れた技術の集合体である。残念ながら人生の非常に大切な時期に、日本の若者は一部の「知」の修練にのみ特化した教育を強いられてきた。

しかし、社会生活において大切なものは「知」だけではない。他人とのつきあいの基本は「情」である。上図な理屈だけで友人や、同僚はついてこない。まさに社会を動かす動因は、「徳」と「情」である。

すでに90年代頃から、知性偏重教育の誤りは理解されてきた。それを学問的に論証する試みもある。人間の知性が「考える知性」だけでなく、「感じる知性」もあれば、「音楽を聴き、つくる知性」もあることが実証されている。

しかし、「感じる知性」を育てるためには「ゆとり」が必要だ。忙しく思考することをやめ、情操を高める音楽（今風のハイテンポな曲は除外）を聞き、古典を読み、或いは映画を見る時間が必要である。その他の「知性」についても同様である。

日本古来の「智・徳・情・体」の均衡の取れた教育を、人間の心身システムとして捕らえ、四つに再区分すると次のようになる。

要素	四	指標	表現	要素
精神 (Spirit)	徳	人徳	自覚、観照、高次自己、叡智、集合無意識、宇宙意識など	
思考 (Mind)	知	I Q	言語・シンボル活動、信念、観念、認知	
感情 (Heart)	情	E Q	心情、感情、気分、感受性、情動、愛情	
身体 (Body)	体	体力	物質性、身体性、身体感覚、身体活動、身体表現、行為	

古典古代において、人間の構成要素は「精神 (Spiritus)」、「思考 (Anima)」、「感情 (Affectus)」、「肉体 (Corps)」に分割された。「健全なる精神よ、健全なる肉体に宿れかし」という格言は、古代の人間の理想型が、その構成要素の全スペクトルにわたる発達であったことを意味している。

特にホメロス時代のあと、古代ギリシャにおいて、この問題は深刻であった。『アエネイアース』には、死者を祀らないと大変なことが起きると畏怖する件がある。ギリシャ人にとって不遇の死を遂げた「英雄」（ヘロス）は、一種の崇り神として機能したからだ。名祖の英雄の「情」を宥めることは、一族の繁栄にも直結していた。

また、先に示した毒杯を呷って自裁したソクラテスの例を待つことなく、「徳」の問題はしばしば個人の生死を超越する大事であった。ソクラテスの弟子プラトンは、「球体の肉体をもつ、雌雄同体の神人」をもちだした。これは、失われた完成形態としての「徳・知・情・体」のバランスのとれた姿の象徴である。かれら古代人にとり、生命の基盤としての肉体はもちろん、目に見えない徳・知・情の均衡は死活的に重要であった。⁽⁸⁾

その後、中世キリスト教文化の「霊と肉の対立」というやや不健全な思想を経て、19世紀から20世紀は、拡大する科学技術文明に支えられた知に偏重した世紀となった。

いわゆる「知能指数」を以て、人間の「頭の良さ」＝「出来の良さ」を判別しようとする運動は、第1次世界大戦中に始まり、たちまち、世界を席卷した。徳・知・情・体の完全性を希求していた古代世界からの「緩慢な思想上の退化」が完結したとも言える。なにしろ、指標は「知」ひとつに落ちたのだから。

これが打開されるのは、1983年にハワード・ガードナー（ハーバード大教授）が「多重知性理論」を唱えてからである。続いて1995年にダニエル・ゴールマン博士が情動知性の重要性を主張するにあたり、主として発達心理学と教育の分野で、多重の視点の重要性が説かれるに至った。

これらの思想は、大脳生理学の発達と切り離せない。ガードナーが重視したのは多重知性の要としての「前頭前葉指数」(PQ; Prefrontal Quotient)であり、ゴールマンは新皮質における知性に対抗する大脳辺縁系の扁桃核の働きをもとに「情動指数」(EQ; Emotional Quotient)を提唱している（正確には、「人生において成功できるかどうか、本当の意味で聡明な人間か

(8) ギルバート・マレー『ギリシア宗教発展の五段階』岩波書店、1971年（改訳版）、238頁。

どうかを決めるのは、IQの高さでなくEQの高さだ。」として、初めてEQという単語を使用したのは、雑誌タイムズのゴールマンに関する書評であった。⁽⁹⁾

これまで知が偏重されてきたため、「考える知性」よりも「感じる知性」の方が重要だというゴールマンの思想は、きわめて新鮮に思える。かれの主張する「情動のハイジャック」は、「感じる知性」が哺乳類に進化する前の爬虫類の脳（脳幹：リプタイル・コンプレックス）及びその周辺の大脳辺縁系という発生学的に「古い脳」に属するため、比較的新しい「考える脳」よりも肉体の支配力が強いことに起因している。そのため、「キレた脳」は暴走する感情のまま肉体を突っ走らせる。感情が激したあまり、見合いの席を立って逃げたり、衝動殺人をしてしまうのは、原始的な「攻撃・闘争」のシステムを「感じる脳」にハイジャックされるためだ。

そこに「考える脳」が介在する余地は殆どない。「感じる脳」は、数倍早く肉体の支配権を握り、感情のままに行動する。もちろん、結果が正しいとは限らない。

しかし、「感じる脳」は危険行為だけをコントロールする訳ではない。IQの高さが「学問的成功」、「成績の良さ」及び「受験の当否」におおむね直結しているように、EQの高さは「人間関係の円滑さ」、「社会的成功」、「自己肯定感の獲得」、「継続的な能力習得」に結びつく場合が多い。

学校での成績が、社会的な成功と結びつかない例は、われわれも多々目にしている。

何故なら、われわれは人間社会のなかに生きており、対人関係を円滑に動かすことが、チームとして、或いはチームのなかの個人としての自己実現をもたらす大きな要素だからだ。そして、いわゆる他者理解やソーシャル・スキルの基本は、豊かな感情をもち、他人の感情を理解するEQの高さにあって、数学的・論理的知性を判定するIQの高さには関係ないことが多い。個人で仕事をさせると上手くやるが、チームに入れると駄目だという人物は、IQは高くともEQが未発達な場合がある。

(9) ダニエル・ゴールマン『EQ：こころの知能指数』講談社、1996年、389頁。

(2) 多重知性理論 (Multiple Intelligences Theory, M. I.)

人間はひとつの生命体として分割不能の存在であり、精神のない肉体、感情のない思考という風に、切り分けて提示することはできない。人体解剖図が、静止した(死亡した)肉体の概略配置を示すように、生きている人間はさまざまな構成要素が混沌と融合した状態で活動している。これらを統括するキーワードは、知性である。

知性 (Intelligentia) とは、知識でもなければ、悟性でもない。人間が自己の内外の環境を理解し、それに働きかける能力である。それが目に見える技能として結実するとスキルと呼ばれる。内在すると智慧と呼ばれる。

人間の知性の性質について、旧来の受け止め方とは異なる定義を述べているのが、ハワード・ガードナー (Gardner, Howard E.) である。

かれはハーバード大学の教育研究所において、プロジェクト・ゼロという多重知性理論に基づいた実験教育を立ち上げた。

かれの思想が最初に発表されたのは、1983年の著作『精神の枠組み』("Frames of Mind")であった。知性は単独であるのではなく、複数の役割を分担する単位知性モジュールの複合体からなるという『多重知性理論』がこの著作で紹介された。これらのモジュールを発達させるには、発達心理学的な時期と環境が強く影響する。

このモジュール化した知性を、かれは知性を8種類(最初は7種類、後に8種類、さらに多数に区分される場合もある。)に区分した。

つまり、人間がリアリティを学習するには、8種類の異なる方法があり、いずれも全人類に共通だと主張した。この8種類の多くは、西洋文化を支配してきた思考法を超えており「知能テスト」では計測できない。

教育界において「知能テスト信仰」は、未だに根強い。

そもそも、第1次世界大戦中にスタンフォード大学の心理学者ルイス・ターマンが考案した筆記式のテストで2百万人の米国人男性を知能別に類別したのが始まりであった。このスタンフォード・ビネー式テストで判別されるIQ (Intelligence Quotient) が、人間の生得の知能を表すと考えた教育者たちは、IQ別に教育内容を変える試みを行った。

平均値が100のIQを物差しに、IQが131以上の「高知能」の学童を天才(秀才)学級に組み込み、一方、IQが81以下の「低知能」の学童を特殊学級に組み込んだ。幸いなことに、現在では人間の知能がIQテストだけで判別できるような安易なものではないことが証明されている。

しかし、この信仰は依然として消えない。米国では、大学進学を判定する重要な能力試験として、SAT (the Scholastic Aptitude Test) を導入している。日本を含む多くの国家も、ペーパー・テストによる「知識、知的理解偏重」の試験で、若者の能力を分別できると信じる者は多い。科挙の伝統がある東洋では、この傾向が著しいのかもしれない。ガードナー教授の多重知性理論は、そのような風潮への警鐘である。

以下、簡単にかれの思想のキーワードを語る。

a 知性の定義

- I 個々の人間が、人生の真剣な問題を解決するための一連のスキル
- II 文化的な価値をもつ、有効なものを創り出し、または、サービスを提供する能力
- III 問題を認知し、摘出する潜在力、
それにより新しい知識の必要性を創出する。

b 知性判定の尺度

- I 脳障害による潜在的隔離
- II 魯鈍（自閉症的）な人物、天才児等の例外的存在
- III 識別可能な中枢活動、または、活動群
- IV 各段階の最終状態の成果で定義可能な個別の発展の歴史
- V 進化の歴史及び進化のもっともらしさ
- VI 実験心理学的作業による支援
- VII 精神判定による支援
- VIII 象徴システムへの暗号化の感受性

c 多重知性理論の原則（キース・ロジャース博士）

- I 知性は単一ではなく、多重である。
- II すべての人間は、ダイナミックな知性の特別な混合体である。
- III 知性は個人及び集団の発達のプロセスにおいて変化する。
- IV すべての知性はダイナミックである。
- V 多重知性を区別し、表現することができる。
- VI すべての人間は、知性の多様性を認識し、発達させるための機会を与えられるべきである。
- VII ひとつの知性を用いることは、他の知性を強化することになる。
- VIII どの知性についても、個人的経験の濃淡は、知識、ビリーフ及びスキルに関して死活的な影響がある。
- IX すべての知性は、時代と環境を問わず、人間がよりよくあるための代替資源と潜在的可能性を提供する。
- X 単一の知性というものは殆ど見あたらない。
- XI 発達理論は、多重知性の理論に適用できる。
- XII 多重知性を研究するにつれ、知性のリストは更新されていくだろう。

d （暫定的に）八つの知性

ガードナーは、多重知性理論に関する最初の著作『精神の枠組み』（" Frames of Mind "）において7種類の知性を定義した。しかし、その時点でさえ「結局のところ、反駁の余地がなく、万人に受け入れられる1枚の知性リストを示すことなどできないと断っておく必要があるだろう。」と述べている。⁽¹⁰⁾ かれは人間の知性には、ほとんど限界がなく、自分の力はここまでだと信じてしまうこと、つまり、「自己限定」こそが、知性に限界を生じさせる唯一の原因だと主張している。これは「知性のリスト」についても同じことが言える。

その後もガードナーのチームは多重知性の研究を続け、八つ目の知性として「自然的知性」(Naturalist Intelligence) を加えるに至った。さらに多重知性の候補として「霊的知性」(Spiritual intelligence) と「実存的知性」(Am Existential Intelligence) も加えている。⁽¹¹⁾ しかしながら、一般的に流布している8種類の多重知性について説明しよう。

(10) Howard Gardner, *Frames of Mind : The Theory of Multiple Intelligences*, New York : Basic Books, 1993, p.60.

(11) Howard Gardner, *Intelligence Reframed : Multiple Intelligences for the 21st Century*, New York : Basic Books, 1999, p.47.

知 性	説 明
言語的知性 (Lingustic Intelligence)	書きことばと話しことばを扱う。 話しをすることやものを書くこと、事実を記憶すること、詩などを通じての学習等
論理的・数学的知性 (Logical-Mathematical Intelligence)	数や記号、図形を扱う。 観察し、推論をまとめ、仮説を定式化し、演繹することなどによる学習等
視覚的・空間的知性 (Visual-Spatial Intelligence)	イメージや映像を扱う。 視覚芸術、想像によるイメージ、色々な視点や方向から対象を心に描くことなどによる学習等
身体的・運動的知性 (Bodily-Kinesthetic Intelligence)	身体と運動を扱う。身体の運動、器具を扱う能力、バランス、肉体の調整、優雅さなどの身体表現力を含む
音楽的知性 (Musical Intelligence)	リズムと音のパターンを扱う。音楽、リズム、自然音などによる学習等
人間関係的知性 (Interpersonal Intelligence)	他の人との言語的・非言語的コミュニケーションを扱う。 一対一の関係、集団の関係などによる学習等
内的知性 (Intrapersonal Intelligence)	自己とその精神的リアリティという内的側面を扱う。自己反省、メタ思考（思考そのものを思考）、直観などによる学習等
自然的知性 (Naturalist Intelligence)	自然界のパターンを認識する能力、狩猟・採取文化においては死活的に重要で、食用になる動植物の判別、区分すること、現代社会では気象変化への鋭敏さや、無数の類似物の微妙なニュアンスの弁別能力など

e 統合する自我

そして、かれは全人格的に完成した人間を育てるために、これらの多重知性を統合するスーパーバイザー、超知性としての自我の重要性を説いた。

この自我の機能は、脳の前頭葉に生じることが分かっており、その前頭連合野での知性を意味する『前頭前葉指数』(PQ)と呼称した。

これは社会関係を円滑、かつ適切に行うための自己感情の制御能力である。このPQフレームを十分に育てないと、いくら他の知性が発達しても、社会生活を円滑に営むことは出来ない。ソーシャル・スキルの未熟性に起因する犯罪の温床なども、PQの未発達に起因している。

PQを発達させるには、特別なことは必要ではない。ごくありふれた普通の対人関係・環境が有ればよい。例挙すれば、次のような古典的な家庭像が浮かびあがる。

- 様々な年齢層の人間関係
- 父親が家庭内・家族内・社会秩序・倫理観を形成
- 豊かな母性愛

未発達のパQを引きずる成人は、幼少時から貧弱な対人環境に晒されていた場合が多い。

f 関連著作

ガードナーは教育、心理学等の分野において約20冊の著作がある。
多重知性に関連する最近の著作は、次のとおり。

- ハワード・ガードナー『多元的知能の世界—MI理論の活用と可能性—』
日本教文社、2003年
(Gardner, Howard. *Multiple Intelligences : The Theory in Practice.*
New York : Basic Books, 1993.)
- ハワード・ガードナー『MI : 個性を生かす多重知能の理論』新潮社、2001年
(Gardner, Howard. *Intelligence Reframed : Multiple Intelligences for the 21st
Century.* New York : Basic Books, 1999.)
- ハワード・ガードナー『修練する精神』2000年 未訳
(Gardner, Howard. *The Disciplined Mind : Beyond Facts and Standardized
Tests, the K-12 Education That Every Child Deserves.* Penguin Books, 2000.)

(3) 人間の諸知性を発達させる学習法

前項の8種類の知性と1対1では対応できないが、人間の全体的な知性を発達させる手段として、古今試みられてきた学習法は、次の7種類に区分できる。

学習法種別 (対応知性)	個 別 の 学 習 法
身体的アプローチ (身体的・運動的知性) (音楽的・リズム的知性) (自然的知性)	ムーブメント、ダンス、オイリュトミー、ボデイ・ワーク (アレクサンダー・テクニック、フェルデンクライス・メソッド、センサリー・アウェアネス、フォーミング、ロールフィング、バイオエナジェティックス)、弛緩法、呼吸法、各種ヒーリング、詠唱、ヨガ、気功法、太極拳、合気道、野口整体、野口体操、操体法、新体道、トロプスなど
感情的アプローチ (身体的・運動的知性) (音楽的・リズム的知性)	ライヒアン・セラピー、ゲシュタルト・セラピー、リバーシング、カタルシス、バイオエナジェティックス、グリーフ・ワーク、インナー・チャイルド、プライマル・セラピー、芸術活動など
イメージ的アプローチ (視覚的・空間的知性)	視覚化 (映像化)、イメージ・ワーク、能動的想像力、アート・ワーク、ドリーム・ワーク、サイコシンセス、ゲシュタルト・合流教育、シュタイナー教育、ヒュプノ・セラピー、オーディオ・ビジュアル教材の利用など
思考的アプローチ (言語的知性) (論理的・数学的知性)	物語発話、物語創作、神話、文学、ファンタジー、日記、生活綴方、創造的問題解決法、メタファー、加速学習、神経言語プログラミング、論理療法、ビリーフ・システム、価値明確化、道徳的ジレンマ、ロゴセラピー、一般意味論、GDM教授法、ホール・ランゲージなど
内的・霊的アプローチ (内的知性)	アウェアネス、マインドフルネス、瞑想 (ヴィパサ、禅、ヘシユカスト等)、プロセス・ワーク、ホロトロピック・セラピー、ネオ・シャーマニズム、トランスパーソナル、サイコシンセス、神話的アプローチ、スーフィズム、グルジェフ・ワーク、エニアグラム、タントラ、タオイズム、チベット密教、カバラなど
グループ・ワーク (人間関係的知性)	協同学習、フィールド・ワーク、社会活動プログラム、コミュニティ・プログラム、対話的アプローチ、エンカウンター、サイコドラマ、交流分析、家族療法、ゲームなど
総合的アプローチ (すべての知性)	サイコシンセス、シュタイナー教育、合流教育、センタリング、ニューカウンセリング、先住民教育、ソシオドラマ、生き甲斐療法、統合学習 (暴力、環境、エイズ、貧困、民族問題等) など

(中川吉晴博士『ホリスティック教育の可能性』初出の表を一部改稿)

4 内在秩序

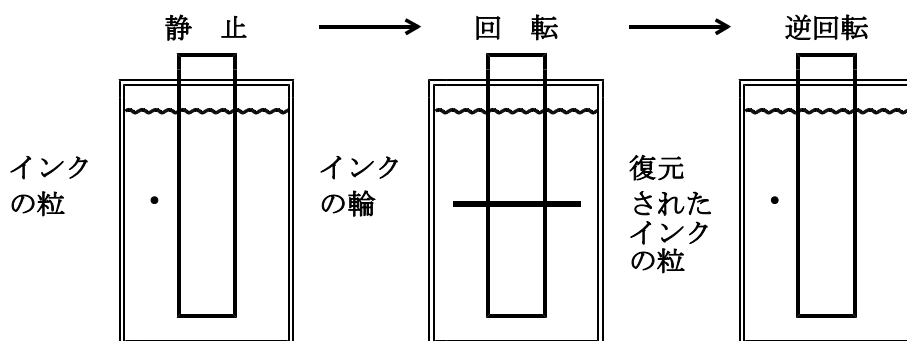
物理学の世界のみならず、われわれの宇宙観を大きく揺るがした今世紀最大の発見は、アインシュタインの両相対性理論とボーアの量子論であった。特に電子レベル以下の物質が、粒子としての性格と、波動としての性格を合わせもつことは、マクロの宇宙が光速による観測の地平線をもつトポロジカルな構造を示したことに加えて、マイクロな宇宙における物質秩序の崩壊をもたらした。(電子以下の素粒子は観測手段の光子をぶつけると、軌道がネジ曲がるため、精密な観測ができない。そのため電子雲という波動状態の広がりでしか、計算できない。)われわれが確かなものと感じている宇宙は、人間の小さな感覚器官に映じた幻影に過ぎず、現実の宇宙は不思議な奥行きを現し始めました。

さて、量子論の世界は、ボーア博士以降、劇的な変化を示した。

その最も過激な先峰がロンドン大学教授ディヴィット・ボーム博士である。

かれは、この現実宇宙が顕現せざる別の領域から投影されたホログラム映像のようなものと仮定し、その巨大で未顕現の領域を「内在秩序」(Implicate Order)、われわれが見ることのできる顕現領域を「外在秩序」(Explicate Order)と呼んだ。この仮定を置いた理由は、対発生電子のスピンの観察結果から得られたものである。そこには哲学的要素こそあれ、オカルト的要素は全くない。

内在秩序の比喩として、ボームはグリセリン容器のなかに垂らした非溶性のインクの喩えを語る。グリセリンの中のインクは最初一滴の黒点だが、瓶のなかにあらかじめ仕込んだ棒を回転させると、攪拌されて輪状になりやがて消えてしまう。しかし、この棒を逆回転させるとインクの輪が復活し、やがて逆回しのフィルムを見るように一滴のインクに戻るのだ。この簡単な実験で、誰もがその不思議な光景を見ることができる。



攪拌されたグリセリンとインクの混合物は、分離した両者の姿を内在する秩序として保管していたのである。⁽¹²⁾

かれは重力波の最小振幅から計算すると宇宙の真空にはとてつもない量のエネルギー（1立法センチの真空に、これまで観測された全物質に匹敵するエネルギー量）が蓄積されており、この宇宙で観察される物質やエネルギーは、そういった未顕現の巨大なエネルギーの大海のうへの微細なさざ波に過ぎないと語る。⁽¹³⁾

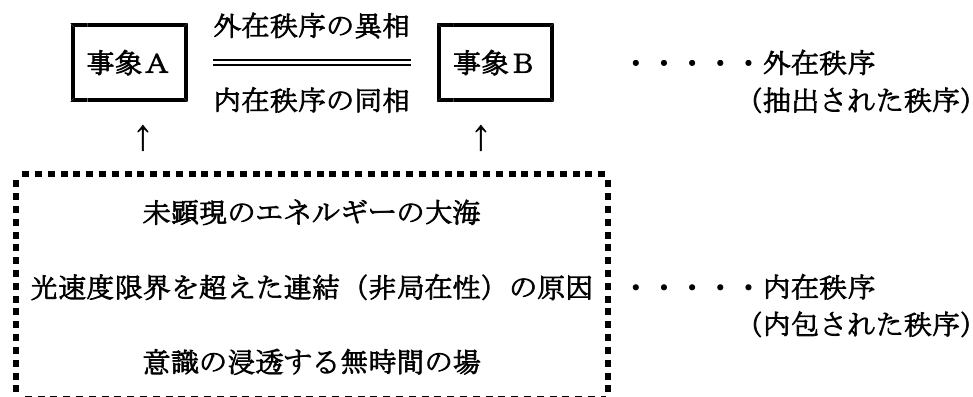
「このような大きなエネルギーを有する空間は、空虚と言うよりむしろ充滿していると言ってよかろう。・・・われわれはそこで物が形成され、維持され、かつ究極はそこに滅し去って行くべきこの充滿を考究する外はないのである。」

われわれが空気を意識せず、魚が水を意識しないように、真空のもつ本来の膨大なエネルギーは「外在秩序」においては、観察されることはない。

(12) ボームほか『空像としての世界』青土社、1984年、97、98頁。

(13) D・ボーム『全体性と内蔵秩序』青土社、1986年、321、322頁。

これによってボームは、超光速粒子を仮定することなく電子の非局在性を解いた。事象Aと事象Bがあたかも（超光速の信号で）連結されたように見えるのは、内在秩序から抽出された（Unfolded）事象AとBは、外在秩序においては連結されていなくとも、内包された（Enfolded）ひとつの事象の別の局面を現すものだからである。



繰り返しになるが、この仮説自体にはオカルト的な要素はない。しかし、ボームがスタンフォード大学神経学教授のカール・プリブラム博士が提唱した脳のホログラム仮説に触れ、汎意識的な全体宇宙論に発展していった。

プリブラムの脳＝ホログラム理論も非常に興味深いですが、ここでは割愛する。

外在する宇宙がホログラムであるという仮定は、非常に大胆で、かつ秘教の学徒には馴染み深い考え方である。ホログラムのフィルムは、破片が小さくなるにつれ画像の明瞭度は落ちるが、幾つに切断しても同じ画像を保つことができる。ホログラムの最大の特徴は蓄積される巨大な情報量と、このすべての部分に全体が含まれるという性質である。この宇宙がホログラムだとしたら、道ばたにある小石にもアンドロメダ宇宙全体の縮図が入っている。それどころか、人間を含めて宇宙のどの断片も他のすべてと同じものなのだ。

この考え方は、アリストテレス以降の西欧哲学の「意味論」(semantics)が追求した「本質存在」(essentia)と「現実存在」(existentia)の関係にほぼ等しい。また、仏教の「空」及び「不空」、ヒンズーのブラフマーの三相の思想にきわめて類似している。そして、われわれは『エメラルド碑文』(Tabula Smaragdina)の有名な一文、

「.....下なるものは上なるものに同じくして、上なるものも下なるものに同じ..... Quod est superius, est sicut quod est inferius,.....」を思い出すはずだ。

ボームは瞬間、瞬間の静的な全体宇宙 (Holographic Universe = Holouniverse) とそれらが流動する時空間として動的な全体運動 (Holomovement) という概念を導入した。これらは内在秩序から抽出された現在の宇宙を構成する要素である。

しかも、われわれには一方向の均一な流れに見える時間さえも連続ホログラム像の運動に過ぎず、反転させたり、停止させることが可能だという。内在秩序においては、われわれの認識する意味での時間は存在しない。

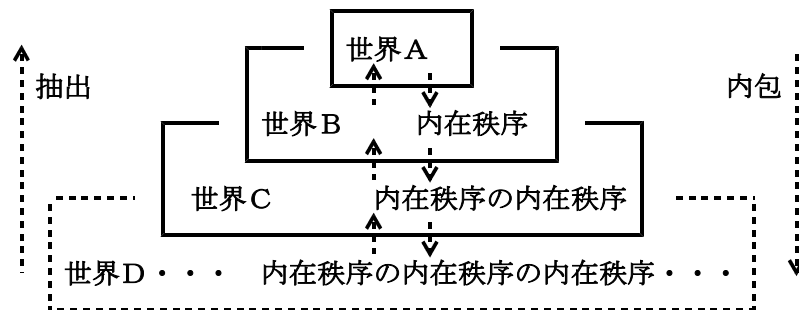
さらに、かれは「意識」と「物質」は同じ内在秩序から抽出された同じものだという。そのため、素粒子実験では意欲的な研究者が新しい素粒子を「発見」するのだし、サイ科学においてはエネルギー保存の法則や、光速度定数を越えた伝達が見られるのだ。それらは因果関係にあるのではなく、同じものが共鳴しているに過ぎない。われわれは外在秩序に突き出した音叉の二つの先端を見て、その理由を訝っているだけである。

この論旨を先に進めると、われわれが宇宙は物質的なものだという思考習慣から脱却し、テーブルの本質に触れることができれば、木製の四脚机を、花瓶にも、自動車にも、イリオモテヤマネコにさえ変化させることができるはずだ。手順は明解である。波動存在であるテーブルの内在秩序に潜り込み（或いは自分の一部として思い出し）、テーブルの意識に接触して、これこれの存在に見えるよう変化してくれと説得すれば良い。

「・・・古典的な物理学では、物質は完全に唯物論的・機械論的なもので、心の入る余地はなかった。しかし、新しい物理学の言うように、あらゆるものは自分以外のすべてのものに包み込まれているとすれば、領域同士の真の分離はありません。心は物質から芽生えてくるのです。じっさい物質は心の本質を含んでいます。・・・あらゆるものは生きています。死んでいるとわれわれが呼ぶものは一つの抽象概念です。・・・」⁽¹⁴⁾

これは魔術の重要な原則とも一致する。すべての魔術は意識ある実在にしか作用しない。そして、実践面では人間や人間に近い霊的存在が最も共鳴現象を起こしやすく。生命を失った家具や、きわめて異質の意識をもつ鉱物存在などは、魔術がかかりにくいのである。しかし、それも程度問題に過ぎない。魔術師は、しばしば、他の星の知霊に働きかけるのだから。

最も意欲的な推測では、内在秩序さえも、超内在秩序とでも呼ぶべき秩序から抽出されたものだと考えることができる。まだ、この仮説の根拠となる実験は存在しないが、意識が世界を越えて働くものであれば、秩序の秩序、秩序の秩序の秩序、・・・という風に階層構造が無限に連鎖していても不思議ではないと考えられる。



これはまさしくカバラや他の秘教的宇宙論が語る階層宇宙そのものである。

(14) ボームの発言、『空像としての世界』、353、354頁。

5 シャーマンの方法論

シャーマニズムは世界の至る所に存在し、名称は異なるが地方の共同体の重要な構成要素として存在していた。シャーマンは、魔法医、治療師、呪師、巫女、賢者、魔女などと呼ばれるが、その本質は同じである。かれらは特殊な意識状態で、不思議な技を用いる。第2項でアルテル・エゴに近似した意識状態として、SSC（シャーマン状意識）をあげた。これは、人類学者であり自分自身もシャーマンであるマイケル・ハーナー博士の造語であるが、シャーマンの特殊な変成意識を上手く表現している。

そもそもシャーマンとは、ヴェーダ語の「スラム」（暖める、禁欲生活を行う。）、ロシア語の「サマン」（呪術）などが語源であると言われている。ヴェーダ語の意味は興味深い。インドのヨガ行者は、行を積むことを体内にタパス（熱）を生むと言う。そして、実際にかれらは瞑想によって体温を上昇させるのである。これがどういう生理学的システムで引き起こされるのか判明していない。熱を発生するメカニズムは、筋肉の運動、2、3の体内物質による細胞代謝の促進しか知られていないからである。

シャーマンは^{エクスタシー}恍惚状態にあつて、呪的飛翔を行い予言や治療をなすものである。エクスタシーとは、トランス状態でもある。その意識状態とは、前述したように覚醒夢に似た境界の意識状態アルテル・エゴである。シャーマンは治療や呪術を行うので、患者や依頼人に指図し、施術する通常の意識野と、夢意識が明確に共存している。⁽¹⁵⁾

アフリカの大地を少人数の部族で移動する狩猟民族サン（ブッシュマン）は、恍惚の踊りにより治療の力を得る。男たちが焚き火を囲んで座る女たちの周りを一晩中踊り続ける。やがて、男たちは一人、一人と恍惚状態に入る。男たちは、神霊のエネルギーがお腹のなかで高まり、背骨を溢れるように駆け上り、頭の中に充満するのを感じる。この恍惚状態に入ると踊りをやめて地面に倒れ込み意識を失う。およそ部族の半数の男たちがシャーマンであり、「半分死んだ」意識状態で、地下を通過して天界に赴く。⁽¹⁶⁾

かれらは理性的な世界とサイケデリックな世界の双方に存在する「境界の遊歩者」である。そもそも文明人の見る「機械的な宇宙」が本物で、よりプリミティブで感受性の強い原始的社会の見る「柔らかな宇宙」が幻想であると誰が決めたのか。シャーマンは、自己と他人、数と区分の存在しない世界を自由に往来できる。こればかりは、体験しなければ分からないだろう。

さて、文化的背景によって、シャーマンの用いる道具の名称は多々変化するが、かれらの技法は基本的に同じである。それらは意識を変成させる補助手段と、変成した意識状態で用いる武器の二つで構成される。

○ 意識を変成させるもの。

ー 幻覚物質

マヤの祭司 : ビール等の低アルコール飲料の痛飲

(腸内吸収のため灌腸器が用いられた。)

中米インディオ : キノコなどの幻覚植物 (ペヨーテのサボテン、ダツラなど)

南米インディオ : タバコ、タバコ水 (麻薬を用いることもある。)

西欧の魔女 : ベラドンナ、マンドラゴラ (極めて致死性が高い。)

(15) ミルチャ・エリアーデ『シャーマニズム：古代のエクスタシー技術』冬樹社、1974年、10、11頁。

(16) E. C. クラップ『天と王とシャーマン』三田出版会、1998年、110頁。

- 楽 器
ガラガラ、ドラム、特殊な管楽器など低い音を出す単純な楽器が用いられる。リズムは必要ではない。低音領域の音は脳内部に大エネルギーの信号を発生させ、過剰刺激により、意識を遮断する。意識水準低下のための強力な武器である。
 - 力の歌
個々のシャーマン、またはその一族によって違うが、一般に単調な反復の多い歌が用いられる。マントラと同様に自己興奮型の刺激を発生させる。カソリック教会の歌ミサに現れる恍惚境を想像せよ。宗教において歌と意味不明の詠唱は、常に最強の武器である。
 - 儀式舞踏
スーフィー・ダンスが有名である。シベリアのシャーマンは、楽器に合わせ回転して踊りながら、トランス状態に入る。アフリカでは、踊りながら野獣に変身するシャーマンがいる。
 - スウェット・ロッジ
北米インディアン用の蒸気サウナ。治療のため、老いも若きもこの狭く暑い空間に囲いこまれる。体温の上昇は免疫作用を増大させるとともに、意識水準を低下させ、意識変成の引き金となる。大汗を流しながら陶然とした患者は癒されていく。
 - 焚火、松明、蠟燭
これらは電気照明のない時代に連続光による脳内の「光ドライブ」を誘因する手段として用いられた。ストロボ光の続くディスコなどで、連続した光を浴び続けると軽い陶酔状態に移行する。
 - 力の物体
荒野で見つけた石、乾いた動物の骨など外見上は特別なものではないことが多い。これらはアルテル・エゴで見て始めて価値が生まれる。そして、しばしば、その形態が個人的な意識変成の引金となる。
- 変成した意識で用いるもの。
- 守護霊
アステカのナワーリ、
 - 霊的盟友または力の動物
魔女の「使い魔」は、歪められた「盟友」の例である。

実践講座

6 魔術的意識への変容

ここで紹介する技法は、一種の道行き（Pathworking）である。また、メンタル・イメージとして捕らえるならば、導入イメージ、安定した場のイメージ、そして帰還イメージから構成されたツールである。この技法を行うことにより、直ちに魔術的意識を獲得できる訳ではない。しかし、その領域にアクセスしやすくなるだろう。

実践に当たっては、個人の内的宇宙に応じた様々なヴァリエーションがありうることを理解しなければならない。必ずしも導入イメージのとおり道行きが進むとは限らない。そのときは自分で道標を入れ替えて、旅を続けなさい。また、導入イメージは記憶するのが一番だが、録音テープに入れて用いても良い。シナリオは全部で4本ある。それぞれに1週間程度をかけるのが良いだろう。むしろ、個人的な判断でそれを変えても良い。

肉体的な準備としては、なるべくリラックスできる椅子に座る。ソファが良いかもしれない。カウチやベッドは姿勢が違うのでお勧めしない。また、背筋を伸ばして瞑想することに慣れた者は、堅い背凭れのある椅子でも良い。

目を閉じて、呼吸を整えよ。四拍呼吸で肉体を弛緩させたら、十分に身体がやわらかいと感じたら。深い呼吸に切り替えよ。肺のなかの夾雑物を吐き出すつもりで、ゆっくりと深く呼吸する。

(1) 第1の技法：カヌーの旅

次のイメージが心のなかを流れるにまかせなさい。イメージが浮んでこなかったら、ひたすらその様子を想像しなさい。

輝く陽光のもと、あなたの目の前に小さな河が流れており、1艘のカヌーが繋いである。あなたはざわめく水音を聞きながら、カヌーが繋がれた栈橋の前に立っている。

河の流れは結構早い。その流れに押されて、カヌーはゆらゆらと揺れ、丸太を組んだ栈橋に、こつんこつんとぶつかっている。あなたはそのカヌーに乗る。

腰を下ろし自分の体重を身長にかけると、栈橋に繋いであった綱が自然に外れて、カヌーは軽いショックとともに走り出す。小川の奔流にもまれて、最初カヌーは激しく上下左右に揺れるが、やがてリズムカルな振動に落ちつき、矢のように小川を駆け下っていく。あなたの想像上の身体が、そのリズムに合わせて揺れるのを感じなさい。

小川の左右には、まばらな森が続いている。その中を角のある草食動物や、小柄な鳥が見え隠れしている。あなたのカヌーは、小川の中央に固定されたように左右の岸から等距離の水面を滑らかに切り裂いて進んでいく。もちろんカヌーの軸先は右に左に揺れるのだが、両岸から均等な圧力を受けているように、最後は川の真ん中を疾駆しているのだ。さて、せせらぎと言うには若干騒々しい小川の水音に耳傾け、水面を吹き過ぎる爽やかな風を感じなさい。

やがて、森の木々の間隔が狭くなり、左右の森は鬱蒼と茂る大樹で暗い緑のスクリーンのように太陽の陰を宿していく。そして、小川の岸边にまで迫った樹木の枝が上空を徐々に覆い隠し、いつしか全く空が見えなくなるとともに周囲は暗くなり、ただ、滑らかに磨き抜かれたカヌーの船首と、周りを飛び去っていく枝葉のおぼろな影だけが、あなたに見えるすべてとなる。小川は轟々と音を発する激流と化し、不快でないまでもカヌーにかなりの揺れをもたらす。森の匂いは濃厚に、かつ湿った枯葉の堆積のような重い臭気が漂ってくる。

やがて、カヌーの船縁を叩く水音だけでなく、前方の闇のなかから滝のような轟きが聞こえてくる。いきなり、あなたの視界を遮っていた枝葉のトンネルが消え、カヌーはちょっとした池ほどもある水面に押し出される。森は突然切れ、上空にはいつしか暮れた夜空が、豪華なピロード色の闇の中に無数の宝石を散りばめた星空として広がっている。この水面の半分を森に囲まれ、あなたのカヌーが依然として進んでいく前方には、巨大な暗い小山が水の面を抱き込んでいた。小山の中央に縦長の裂け目があり、その裂け目の下端に白い飛沫をあげて水が流れ

込んでいく。轟々という水音はそこから発していた。あなたのカヌーは水面下の見えざる腕に引き寄せられるごとく、その大地の裂け目に向かっていく。

覚悟を決めてカヌーの船縁を掴みなさい。木の葉も同然のカヌーは、一気に大地の裂け目に吸い込まれていく。左右に白い激流の柱が立ち、あなたのカヌーは1回激しく揉まれると鼻を摘まれても分からないような真の闇のなかに呑み込まれていった。

まるでテーマパークの洞窟くぐりである。あなたのカヌーは完全な闇の中を前に急な傾斜をつけて滑り落ちていく。揺れは振幅が小さく、早く、ほとんどカヌーが高速で振動しているようだ。途方もない落下感覚、速いようでもあり、微速度撮影のようにスローで落ちているようでもある。闇のなかで時間という要素が欠落し、或いはカヌーのなかから滑落していく。

望みのままに落下感覚を味わいなさい。

この間に闇のなかに何があるか確かめてみても良い。

あなたの周りにある確実なものは異界を旅する乗り物、不安定なカヌーひとつという状態を自分が望むだけ続けなさい。

落下感への集中や、興味が薄れてきたら、前方に出口を造る。

まず、暗黒のなかに白いリングを視覚化しなさい。そのリングは、下側から三日月に、どんどん白い肉の部分膨れあがらせ、半月に、そして徐々に満ちていき、やがて、完全無欠の満月となる。

あなたのカヌーは遥かな底にある月影に向かって落下していく。そして、その月影は急速に大きくなり、視界の半分を占め、白いチーズのような滑らかな光の円のなかにあなたは着水する。

カヌーは何の衝撃もなく、このムーン・プールのなかに潜り込んだ。

あなたを取りまく全てが、少し蒼ざめた白い月光に満たされている。身体に染み込んでくる月光の甘さを味わいなさい。イメージのなかの肉体が希薄化し、その細胞のひとつひとつに精妙な月光の湖が潜り込んでくる。癒された感覚、全身の全てが活性化され、肉体が燃え上がるような強いイメージを保ちなさい。

カヌーはこのムーン・プールのなかをゆるやかに進んでいき、やがて唐突に白いプールのなかから飛び出す。

あなたのカヌーは空中を飛行している。

秋の早朝の晴れ上がった空のなかを、どこまでも深い青空に囲まれて、カヌーは軽やかに飛翔する。この空から地上は見えない。上下左右は深い青に染め上げられ、ただ自由奔放に泳ぐ大小の雲だけが、壮大な蒼い空間にアクセントを添えている。あなたの前にその美しい雲の山並みが広がり、自然の織りなす深い陰影と造形のなかを途方もない速度でカヌーは飛んでいく。

ひとつかたまりの雲を間切ると、あなたの進行方向を巨大な虹が空を染めていた。それは地上で見る半円の虹、不完全な虹ではなく、異次元の扉を見るような真円の虹、つまり、完全無欠な虹の円環である。あなたのカヌーは凱旋門をくぐる将軍のように、光の歓呼の叫びに包まれて虹の円環をくぐる。

これから先は帰還へのプロセスだ。あなたのカヌーは下方に徐々に高度を落としていく。雲の切れ間に茶色の地上が見え隠れし、その光景はすぐに町や川の連なるパノラマへと変貌する。あなたは町の特定のパターンを見分けることができる。それは今住んでいる場所、あなたの肉体が靈魂の帰還を待ちわびている家のある土地である。世界は急速に身近になり、自宅の屋根かベランダの上にカヌーは軽やかに着陸する。

カヌーは空気できているように透明化し、消え去る。あなたのイメージの身体は屋根などを突き抜け、肉体に帰還する。

ゆっくりと目を開けなさい。身体を動かし、血肉の感覚を把握したら、魔術記録をつけなさい。



(2) 第2の技法：妖精の輪

次のイメージが心のなかを流れるにまかせなさい。イメージが浮んでこなかったら、ひたすらその様子を想像しなさい。

夜の森のなかに立っている。あなたの前方にはゆるやかな起伏の丘がそびえている。鬱蒼と広葉樹の茂る森に囲まれて、ほとんど木の生えていない丘は、妙に生々しい大地の膨らみとして感じられる。あなたは森のなかから、丘に向かって延びた踏み分け道を進んでいく。道はやっと歩けるほどの赤土を踏み固めたもので、舗装はおろか、人間が造ったものでさえないかもしれない。あなたの背後から月が丘を照らしている。草に覆われた丘の斜面のところどころに人間ほどの大きさの岩が露出しており、月の光が長い影を生み出している。

あなたの進む道はわずかな登り勾配で、斜面をゆっくりと横断している。もし、真上から見たら螺旋を描いて頂上に回り込みながら近づいているかもしれない。丘の麓から上方に微風が吹き上げている。濃厚な草の香りを含んだかすかに肌寒い風があなたを包んで、上へ、上へと牽引する。やがて、丘の頂上が見えてくる。平坦な50mほどの直径をもつ円形の頂上には、12柱の巨石で構成されたストーン・サークルが夜空に向かって聳えている。それぞれの巨石は、幅が人間の両手を真横に広げたくらいで、高さは大人の身長3倍ほど、一方その厚みは人間の胸幅くらいしかなく、遠目に見ると薄板が地面に多数突き刺ささっているようだ。その板の平らな面は内側を向いており、それぞれが10m間隔位で並んだ巨石の円環は、およそ直径40mほどにもなり、丘の頂上の大半を占めている。



あなたは丘の頂上に足を踏み込み、そのストーン・サークルを左回りに周回する。ストーン・サークルの外周には、2重の浅い溝が彫ってあり、石柱そのものの円を追加すると三重の輪になる。最外周の円は、浅く彫られた溝の底に白い平らな石が敷き詰めてあった。あなたはその白石の上を踏みしめながら一回周行する。それが終わると、内側の溝に進んで、さらにもう一回、左回りに二番目の溝の上を踏んで歩く。二番目の溝の底には黒い平らな石が敷き詰めてあり、あなたの靴底で石が弾ける。

二度の周行が終わると、いよいよ石柱の間に身体を割り込ませる。石柱の内側は、ちょうど播鉢のように窪んだ土の斜面があり、丘の中央付近が最も深く、暗い。

あなたは三度目の周行を開始する。ストーン・サークルの巨石の列を右手に見て、左回りに周行する。巨石の平板な内側には、黄道12宮のサインがひとつずつ刻んであった。あなたが歩き始めたのは、白羊宮の2本の角が深く彫り込まれている石を見る位置からだ、順番に獣帯を通過しながら、同時にあなたの足は僅かに内側に向いて、身体は左に傾き、少しづつ螺旋を描きながら、丘の中心に下っていく。目眩に似た感覚が襲う。

歩きながら身体が地面の底に吸い込まれていくような、落下感覚めいた錯覚があなたを包む。膝が浮いたようで、足下が危うい。

金牛宮の角と菱形の顔で構成された刻印を右手に数えたときは、斜面の柔らかい表土を踏み抜き、靴底が堅い大地の地肌に触れた。この古への祭場を形造る大地の生々しい力が足底から湧き出て、背骨を伝って脳天まで貫く。

双子宮の古いローマ数字を右手に数えたときは、行手の闇のなかに小さな生き物が走り過るのを見たような気がする。丘の住人であろうか、はたまた星の霊が地上に像を結んだのであ

ろうか。

巨蟹宮の双螺旋を右手に数えたときは、地底を目指す螺旋の渦そのものが暗黒の水に満たされたようで、心臓がぎゅっと絞込まれたような圧迫感を覚える。螺旋状の水路のなかには水棲の動物が緑色の鱗を煌めかせて、重い鰭で水を掻いている姿が見えるようだ。水の幻視は、すみやかに低い中央部に向かって引き潮のように消えてゆく。

獅子宮の勇猛な尾を右手に数えたときは、遠くの草原から猛獣のかすかな雄叫びが響いてくる。やがて、その叫びに応じるがごとく、人間の耳には聞き取れない重低音の振動が丘の底から吹き上げて、あなたの耳ではなく、背骨を楽器のように鳴らす。

処女宮の優美な刻印を右手に数えたときは、12本の巨石の基部に置かれた礎石がこの丘の内部を編目状に走り、複雑な石のネットワークを形成しているのを感じる。しかし、あなたが今降下している丘の中心部には人工石はひとかけらも存在しない。あなたは、土と自然石の堆積である丘の暗い中心部にひそかな不安を感じる。

天秤宮の深い刻み目を右手に数えたときは、満天の星空から女神の巨大な指が降りて来て、やはり星素で形つくられた巨大な白い羽毛の軸を丘の中心に突き立てる。その審判の羽毛はあなたの行く手を示す炬火のように一瞬まばゆく輝いては消滅する。

天蠍宮の尖った尾を右手に数えたときは、湿った土の香とともに何者かの金臭い存在感が周囲を包む。踏み分ける石くれの陰に走り去る小さな生き物の気配がある。足下の丘が透明になり、微少な生命の靈気が丘の内部に向かって、数千数万となく駆けていく様子が、見える。

人馬宮の矢を右手に数えたときは、天の星の光が左手の闇の底に凝集し、大地の底に深夜の虹が出現した。この虹は空にかかる半円の虹ではなく、丘の中心を取り囲むように水平な円盤状である。ほのかに輝く虹の円卓は、あなたの心にかかる暗雲を払ってくれるようだ。

磨羯宮のねじれた角を右手に数えたときは、丘の内部に随分と入り込んでおり、空は12本の石柱が牙のように並んだ開口部としか見えない。あなたの動きに応じて、その石柱の先端が星を横切っていくさまは、歯車が空の上を回転していくように思える。

宝瓶宮の波打つ線を右手に数えたときは、丘の外に吹く木枯らしが上空を吹きすぎていくのが感じられた。石柱の間を抜ける風が、巨石を洋琴の弦のように鳴らし、丘そのものが共鳴板となって震える。その音は確かなリズムを刻んで大地の底、遥かな地底の王国の扉へのノックとして、繰り返し響いていった。

双鱼宮の2尾を右手に数えたときは、もはや石柱の基部は見え、そのサインと巨石の頂点が僅かに霞み見えるばかり。あなたの身体は深く、ゆるやかに埋没していく。周囲の空気が濃密な渦をなして、愛撫するようにあなたを飲み込んでいく。膝は碎けて沈み込む。深く、深く。すぐに何も見えなくなる。

地面に吸い込まれたあなたは既に人間の姿を失っている。巨大な石と石の間を雨水が滴るように、形をなくしたあなたの視点が複雑に絡み合う半ば化石化した大樹の根の隙間をくぐっていく。地面に浸透する液体のごとく、あなたの視点も拡散していく。幾つもの岩が螺旋状に組み合わせ、その間を土と石化した泥炭が埋めている丘の内部の隅々まで、あなたの視点がさまよう。もはや目だけになったようなあなたは、下へ、下へと染み込みながら大地の真実を見ていく。鍾乳石に囲まれた空洞に流れる地下水の河がある。卵の形をした巨石の基部には、見たこともない獣の骨が犠牲の祭壇に焦がされた後を残して堆積している。びっしりと石灰石が詰まった洞窟には額を打ち割られた人間の遺体が並べられている。これも古代の祭司の犠牲者か。すっかり化石となった羊歯の巨木がパイプオルガンのように並び、水が空洞の内部を通り過ぎるとき、石化した葉脈を弾くかそけき水音が聞こえる。さらに深く潜ると地の靈たちの領域に辿りつく、人間に似た小さな影や、得体の知れない獣の姿をした地靈たちが、石の王国を築く鎚音が響いてくる。ところどころには、地熱で真っ赤に灼かれた鉱物が、地靈の手でさまざまな宝物に変化していく。未だ人目に触れない宝石の原石、大地の王が封じた財宝、地球の秘密などが隠されている。あなたは液状化した指で化石の森に包み込まれた巨石の平らな表面に「地」を守護する大天使の名前を書く。 אֱלֹהֵינוּ

そのヘブル語の文字は、瞬時に岩肌深く刻み込まれ、内側から光を放ち始める。巨石の表面が矩形にくぼみ、あなたはその穴に吸い込まれる。

再び肉体が構成された、あなたは灰色の雲の中を降下していく。

これから先は帰還へのプロセスだ。あなたの身体は、下方に徐々に高度を落としていく。雲の切れ間に茶色の地上が見え隠れし、その光景はすぐに町や川の連なるパノラマへと変貌する。あなたは町の特定のパターンを見分けることができる。それは今住んでいる場所、あなたの肉体が靈魂の帰還を待ちわびている家のある土地である。世界は急速に身近になり、自宅の屋根かベランダの上にはあなたはそっと着地する。

あなたのイメージの身体は屋根などを突き抜け、肉体に帰還する。

ゆっくりと目を開けなさい。身体を動かし、血肉の感覚を把握したら、魔術記録をつけなさい。

7 境界の住人

(1) 境界の概念

世界構造を最も単純化すると、人間によって秩序づけられ有機的構造をもつコスモスと、無定型な状態で浮動的なカオスに両極化される。⁽¹⁷⁾そして、コスモスとカオスを隔てるのが「境界」である。より厳密に言うともコスモスとカオスの間に連続的に変化する境界層が存在するという方が正しいかもしれない。

一般に境界は二つの世界、二つの領域を分ける働きをする。エドモンド・リーチは「自然のままの状態にあって、もともと切れ目のない連続体の場のさなかに、われわれは人工的な境界をあれこれと創り出している。」と言う。⁽¹⁸⁾かれの示したA領域と非A領域が重複する場合の曖昧な境界は右上図のとおりである。Aと非Aが連続的に変化する場合は、その境界領域は、どこからどこまでと定義できない。きわめて曖昧な状況になる。

一方、Aと非Aが重複せず、不連続な場合については、右下図のように両者の中間にあって、どちらにも属さない部分が境界を構成する。⁽¹⁹⁾

そして境界領域には、境界を明確にするための目印、ランドマークなどが存在する。

空間的な領域の境界としては、土地を囲い込む壁、道の終点の門、山河や崖などの自然物、そして石碑などがある。バビロニア人は所有地を記録するために、銘や浮き彫りの神聖図形を入れた男根形の石を据えた。ローマの境界石は、境界 (terminus) という名前をもつ守護神に管理されていた。⁽²⁰⁾

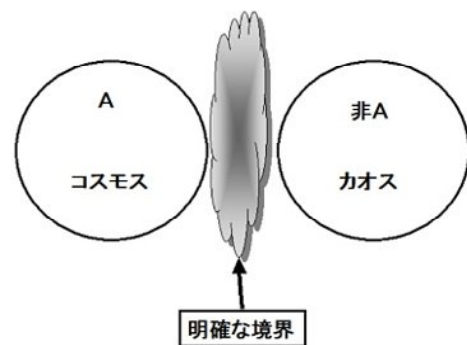
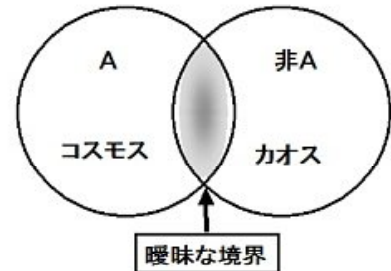
社会習俗的な領域の境界には何があるだろうか。古来、子供の社会から大人の社会に入るためには通過儀礼が存在した。江戸時代までの日本の農村社会では、青年になるための共同生活が存在した。未開社会においては、成人儀式を必要とし、その儀式的傾向は顕著である。

文明社会と自負する世界にも、入学式、成人式、入社式などの簡素化された通過儀礼が存在する。

文化人類学者ヴァン・ジュネップは、通過儀礼 (移行の儀礼) をラテン語「境界 (limen)」という言葉を用いて、次の3段階に整理した。⁽²¹⁾

- | | | |
|----------------------|---------|------------------------------|
| 前境界期 (preliminaire) | — 分離の儀礼 | 前境界儀礼 (rites preliminaires) |
| 境界期 (liminaire) | — 移行の儀礼 | 境界儀礼 (rites liminaires) |
| 後境界期 (postliminaire) | — 加入の儀礼 | 後境界儀礼 (rites postliminaires) |

ジュネップは、ローマ帝国の凱旋門で執行された外征軍の凱旋儀式を例示して、ユピテル・カピトリス神と都市の守護霊に犠牲を捧げることで、凱旋した軍勢を敵の世界から分離すると指摘した。マホメット時代のアラブ人は家から出入する際に、家の神に触れた。すなわち、出



(17) ミルチャ・エリアーデ『聖と俗』法政大学出版局、1969年、21-22頁。

(18) エドモンド・リーチ『文化とコミュニケーション』紀伊國屋書店、1981年、71-78頁。

(19) 保坂陽一郎『境界のかたち：その建築的構造』講談社、1984年、6頁。

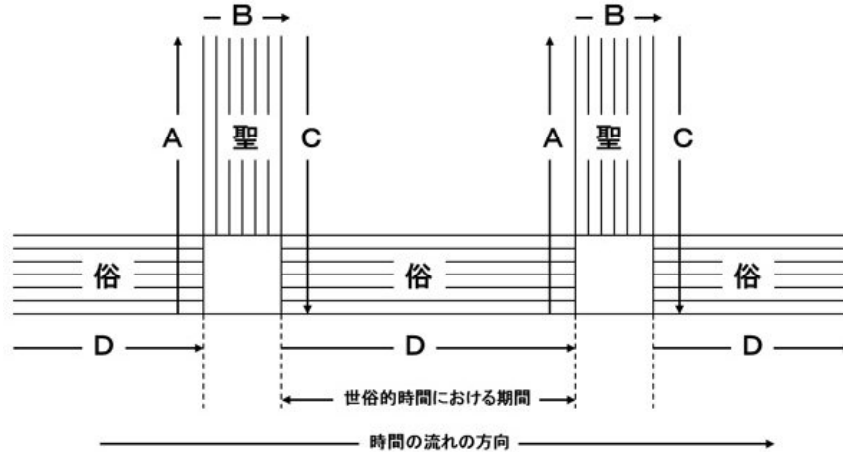
(20) ヴァルター・ブルケルト『人はなぜ神を創りだすのか』青土社、1998年、221頁。

(21) A. V. ジュネップ『通過儀礼』思索社、1977年、17-27頁。

発時の分離の儀礼と帰宅時の加入の儀礼は全く同じ動作で行われた。

また、家においてはしばしば正門のみが通過儀礼の場とされ、都市の門の儀礼的柱廊がしばしば「敷居の守護神」の住居となり、人間の肉体が通過すると同時に、その精神は「敷居の守護神」に儀礼を捧げる精神的な通過（人格化された力による非具体的な通過の承認）を意味するようになると指摘した。ジュネップは「敷居を超えること」が新しい世界に入ることを象徴すると示したのである。

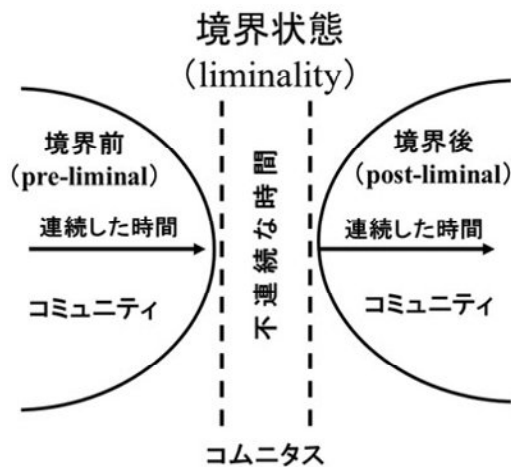
エドモンド・リーチは、祭儀を契機として「世俗的秩序」と「聖なる秩序」を往復する人間の内的変化を下図のように示した。⁽²²⁾



世俗的秩序から聖なる秩序に移行する局面Aにおいては、ジュネップの聖化の儀礼または分離の儀礼が行われる。デュケールム学派の言う「道徳的人間」は世俗から抜け出るため「死者」になる。聖なる秩序の局面Bにおいては、道徳的人間は聖なる状態にあり、境界のなかで一種の仮死状態となり、社会の日常的時間は停止している。脱聖化のプロセスとも言うべき局面Cにおいて、集団の儀礼が実施される。道徳的人間は世俗の秩序に復帰し、再生される。かれの上に世俗的時間があらためて流れ始める。局面Dは、局面ABCという非日常の祭儀と対照される世俗生活の局面である。いわば祭儀から祭儀の間にある間隔期である。

この考え方を発展させたのがヴィクター・ターナーである。

ターナーは、種々のイニシエーションにおける「境界性 (liminality)」と、「境界における共同体 (communitas)」を定義した。⁽²³⁾



左図に示すように、人間は前境界期においては所属するコミュニティのなかで、連続した時間の流れにある。境界状態 (リミナリティ) に入った人間は、不連続な時間に支配され、コムニタスにおいて曖昧な存在となる。このコムニタスと言う用語は、ターナーがラテン語の「communitas」から転用した造語であり、境界状態以外の正常なコミュニティと、境界状態の人間が属する集団を区別するために設定したものである。

そして、境界状態を脱した人間は後境界期において、連続した時間とコミュニティに復帰する。

コムニタスを永続的な組織構造と見るのは誤り

(22) エドモンド・リーチ『人類学再考』思索社、1974年、226-228頁。

(23) V. W. ターナー『儀礼の過程』新思索社、1996年（新装第2版）、126-129頁。

である。それが何度も同じかたちで形成される場合でも、安定した社会構造の構造と構造の隙間、移行期間に出現する。⁽²⁴⁾

(2) 境界を歩む者

秘儀参入においては、参入者は「境界を歩む者」となる。境界を歩む者には、深刻な危険が存在した。それは一般に「境界の守護者」と呼ばれる存在に具象化されている。

古来の魔術の学徒たちが、畏敬の念を込め「境界の住人」(Dweller on the Threshold)と呼び、その一部を神殿などの門を守る「境界の守護者」(Guardian of the Threshold)⁽²⁵⁾として捕らえてきた。かれらは、古代から人間の内的世界に位置を占めてきた、ある霊的存在である。

かれらは異界へと近づく者の前に現れる不気味な影である。ときとして、不法な侵入者を恫喝し、または正しい答えを求めて問いを發する。この概念を最初に明確な形にまとめあげたのは、ブルワー・リットン卿(1803-73)の『ザノーニ』である。そこにはオカルティストのカルマの総集成としての不気味な「境界の住人」が描写されている。それは非常に魅力的なイメージだったので、その後のオカルティストたちによって繰り返し用いられた。もちろん、これはオカルトだけの概念ではなく、神話の世界に通底する人類共通の概念である。



西欧において最も身近な境界とその住人は、十字路と鬼神である。エルツ山の風習によれば、大晦日の真夜中に十字路に来て円を描いてその中に立ち、一定の呪文を唱えて死者の名を呼ぶと、死者が現れて新年に起こる出来事を教えてくれる。十字路には無縁の死者が埋められ、古来、十字路に立つと死者を導くヴォータン神の軍勢を見ることができると言われた。⁽²⁶⁾

ダイアン・フォーチュンは、ユング心理学の「影」の概念と比較して、「境界の住人」について、次のように語っている。

「われわれの魔術用語における「境界の住人」とは、個人の過去の全て、かれを型どってきた全てのものを示す。故に、それは「影」を総合したものとなる。『境界の住人に向き合うこと』は、過去の全体像に直面し、過去の全て、現在のあなたの人格を形作る過ぎ去ったもの全てを受容せよという呼びかけに対決することである。それは統合の過程の後半に訪れる。「生命の木」の上では、『過去が現在となる』場所ダースで既に現実化が完了したケセドのイニシエーションに対応する。「境界の住人」に包含される全てを、心理学的記述で明快に解明することはたぶんできないだろう。この統合過程は(いわゆる)ティファレットの小さな統合ではなく、わたしの知る限りの刊行物では取り扱われていない完全な統合を目指すものである。「境界の住人」は、その種の経験における幻視として出現する。決して、ありがたい天使や四大霊と混同してはならない。それは個人的な形態での罪障の集合体の顕在化、または罪障を意識することによって浮かびあがるものである。その形は、罪障の性質に応じて変化する。この幻視または意識とは、実際の深い統合化または霊的な進化の過程が達成される前に遭遇することになる。それは個性の回心せざる側面を緩和することが可能である。「背教者」のイメージまたは位相)この現代的な教えに肉薄するものがエジプト人の「心臓を喰らう者」に表現されている。「境界の住人」に対面する恐怖は、「高次の自己」の「逆転した」位相(「潜在的な」または「緩和されない」と、その投影の罪障を救済するため「罪に堕ちた」高次の自己の受苦と結びついた、どこか神々しい外観で現れる。それは深い瞑想

(24) 青木保『儀礼の象徴性』岩波書店、1998年、282-283頁。

(25) ジュネップ、前掲書、27頁。

(26) 阿部謹也『中世を旅する人びと』平凡社、1978年、382-383頁。

のなかで熟考すべき題目であろう。完結にまとめるならば、「境界の住人」とは、個人の過去の人生の集約効果であり、独立した生命体のような見かけで、自分の外に出現する自分自身の逆の人格である。」⁽²⁷⁾

フォーチュンの説明は、心理学と秘教的概念を混合しており、ややわかりにくいものになっている。彼女が「境界の住人」の例として述べているのは「死者の心臓を喰らう者」、すなわち有名な『アニのパピルス』に図版入りで紹介された鱈の頭部と河馬の胴体をもつ雌の怪物「アムミット」である。この怪物は、「アムム・アメンタ」すなわち「死者の都市の貪り喰らう者」とも呼ばれている。これは後期エジプトの信仰である羽毛の審判において、不義の死者の心臓を食い尽くそうと待ちかまえている怪物である。「心臓を喰らう者」は、霊界に属する準神的存在であると同時に恐怖の対象なのだ。

もちろん、これは死者のイニシエーションにおけるエジプト人の抱いた共通の畏怖の投影であり、「境界の住人」が常にヒューモラスな怪物の形で現れることを意味するものではない。むしろ、フォーチュンが語るように個人個人の問題に応じた姿と感情的雰囲気を与与されて出現するだろう。そして、エジプト人の審判の広間のような特別な場所に限らず、彼岸と此岸の境界において、われわれの前に必ず現れる。⁽²⁸⁾

神話学の立場では、「境界の住人」は優しさと厳しさを併せもち、人間の意識が新しい局面に向かおうとするときの、無意識から湧きあがる親和と拒絶の入り交じったアンビバレンツな感情が投影されたものである。そのため境界の守護者は、しばしば、四足獣や鳥で現され、限定された魔力をもっている。かれらは二つの世界の境界線に陣取り、それ故に両方の属性を有している。エジプト神話のアムミットのほかに、ギリシャ神話の忘却の河レテを越えて死者を渡す船頭のカロンや、三途の川の岸辺で死者の現世の記憶とも言うべき衣服をはぎ取る脱衣婆、アサ神族の長ヴォータンの肩にとまる大鳥などが共通するイメージである。しかし、自己の内部深く潜行したときに直面する「境界の住人」はより個人的なイメージが作り出した自分ひとりの怪物、自分自身の反転像となる。次のステップに進むためには、対立する怪物としての「境界の住人」を、自己に味方する「境界の守護者」に変容させなくては行けない。

様々な文明で実施された参入儀式 (Initiation) は文字どおり「入っていく」(INITIA) という言葉から構成されているが、その最初の部分に「境界の住人」は「境界の守護者」として役目を変え、先に述べたように高度な精神的発展を遂げる者が通過すべき感情的対立物として投影される。それ故に「守護者」は、二体で組む場合もある。例えば、東大寺南大門には高さ8メートルにも及ぶ二体の金剛力士像が左の像は「阿」すなわちアレフを発音する形に口を開け、右の像は「吽」すなわちムムを発音した後の唇をきりりと引き締めた形で立っている。この像は彼岸への擬似的な門として、それを通過する人間の物質的欲望、現世の肉体への執着、死への恐怖を現しているとも言える。

われわれの日常社会における「境界の守護者」としては、税関や空港の入国管理員などがそうだ。かれらは飛行機が曖昧な中間領域を飛翔してきて、旅客が最初に直面する外国との敷居を守る者である。やさしく対応するが、密入国者や、違法行為をする者を厳格に拒絶するのだ。

そして、これまで述べてきたように「境界の住人」が未成熟な自分の心の投影であるならば、リットン卿が言うようにニオフアイトが一度喚起すれば終わりという性質のものではない。禅の悟りに段階があり、小さな悟りを幾度も積み重ねて大悟に至るように、径を求める者は幾つもの「境界の住人」と対面し、それを克服していかねばならない。

フォーチュンの正当な後継者と目されるW・E・バトラーは、この側面を「小さな境界の住人」と「大きな境界の住人」として表現した。かれの場合、境界の住人の否定的な側面は未整

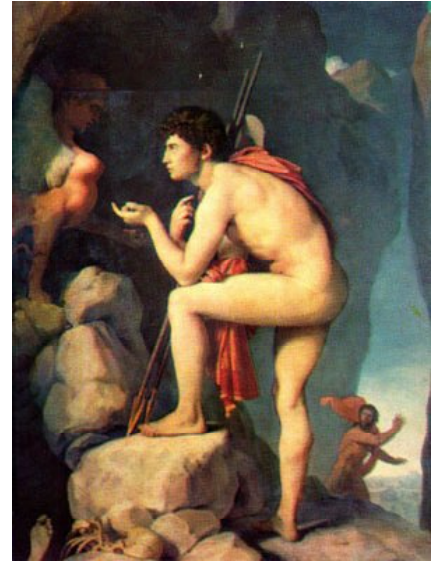
(27) Dion Fortune, *Applied Magic*, Wellingborough : The Aquarian Press, 1987, pp.82f.

(28) Gareth Knight, *A Practical Guide to Qabbalistic Symbolism Vol,II*, Toddington : Helios Book Service, 1965, p.117.

理な影の複合体として、卑近な例にも凄絶な過去生の現れにも登場すると言う。

「小さな境界の住人の例を見よう。・・・「境界の守護者」に直面するという事は、あなたの通常の意識が、きわめて鋭敏に目覚めた条件下にあることだ。汚水は下に流れ落ちるものだ。われわれが慎重に集めて溜め込んだ霊的な収集物は、この下水管のなかに落ち込んでいゝ。そこにあるものは、われわれの一部でもある。『何てことだ、こんなものは持っていない。こんなことを考えたりしない。』と叫ぶ訳にはいかない。・・・例えば、聖職者の妻君について、麻酔状態にあるとき、聖職者にあるまじき感想や意見を漏らすのを聞いたことがある。催眠状態でもこれが起こる。あなたが境界の住人の不格好な頭を育て続けるなら、あなたはどこか嫌な奴になるだろう。・・・」⁽²⁹⁾

ここでは「影」の要素がきわめて強い。「影」とは何だろうか。人間が一面的な明るさを追求すると、自分の内部に存在する暗い要素をすべて無視することになる。月が暗い半面をもつように、人間のなかにも元型的闇、非存在の原理、悪魔的な位相、原罪、死の翼などと言いつゝ現されてきた抑圧された闇が存在する。神さえも純粋な光ではないのだ、それ故にわれらの祭儀では「光と闇の主」と呼ぶ。人間の「影」のなかに現れるのは、これら無視された要素である。表面的人格が自分の長所や才能をその暗さ故に無視すると、これらの長所や才能は社会の除け者に分類される。すなわち、無法者、社会不適格者、不具者、異形のものである。これらは神話の世界ではお馴染みの要素である。英雄たちはどこかに対戦し、打ち勝つべき巨人、魔物、怪物を求めている。自らの心を見つめるため荒野に赴く行者の前には誘惑する悪魔が現れる。そして、英雄はこれらの「影」に直面し、「影」と戦い、「影」を統合しなければならない。



「大きな住人もいる。愚かなことに、たくさんの方が小さな住人と出会う前に、この大きな境界の住人に話しかける。・・・聖ラウレンティウスのように焼けた鉄格子の上で夜通し炙られたことを思い出す、ただ思い出すのだ。そのような過去の断片を現在の生活に持ち込もうとするだろうか。それらの記憶が蘇り、しかも昨日何が起こったかという死んだ記憶ではなく、あたかも体験中であるかのように、過去生のときを感情的に生々しく思い出すのだ。あなたが鉄格子の上で灼かれる聖ラウレンティウスであるかのように。・・・個我が「輝く自己」に接触する以前に、個我の過去の暗黒の全面的攻撃に直面し、耐えねばならない。・・・それは事実上、「魂の暗夜」である。」

「小さな境界の住人」が個人レベルの「影」であるなら、「大きな境界の住人」は人間という種族の背景に潜む闇である。そして、この闇はある特別な機能を有している。その機能とは、反社会的な色彩をもちながら、社会の枠を超えて前進しようという人間を押し出す力動的な作用、トリックスターとして出現する。例えば、ギリシャ・ローマ神話のヘルメス・メルクリウス、北欧神話のロキ、キリスト教のルシファーなど神の姿を纏いつつ苛烈な試練を人間に与える者たちである。WEBによると、これらの神の攻撃を乗り切らねば、「輝く自己」に出会えない。すなわち霊的進化を遂げることができないのである。⁽³⁰⁾

(29) W.E.Butler, *Lords of Light*, Rochester : Destiny Books, 1990, pp.72f.

(30) W.E.Butler, *Practical Magic and the Western Mystery Tradition*, Wellingborough : The Aquarian Press, 1986, pp.28f.

8 守護者との対話

ここで紹介する技法も、一種の道行きである。注意事項は5項に同じ。しかし、先の道行きでは人物が登場しなかったが、このイメージのなかでは擬人化された姿が出現する。その点に留意しなさい。深刻な危険はないが、強い寒気や、恐怖感などというネガティブな感情・感覚が出現したら、強い意志で、それを放射している対象を遠ざけなさい。必要ならば、イメージのなかでホルスのサインを用いること。追跡されたり、攻撃された場合は、反撃を試みること。しかし、さらに抵抗されてイメージが混乱していき場合は、途中の過程を省略し、肉体に戻った後、生身の身体で小五芒星の追難儀式を行うこと。

(1) 第3の技法：迷宮の探索

次のイメージが心のなかを流れるにまかせなさい。イメージが浮んでこなかったら、ひたすらその様子を想像しなさい。

あなたは地中海の葡萄酒色の海を望む入り江の砂浜に立っている。背後には、ざわめく波打ち際が広がり、前方には砂浜がすぐに切れて小高い岩の丘が迫っている。その丘の斜面にはめ込まれたような大理石の建物があり、暗い入り口が丘の内部へと続く深い開口部となって、あなたを待っている。これは地下迷宮への入り口である。あなたはためらいなく、その小暗い迷宮に入り込む。

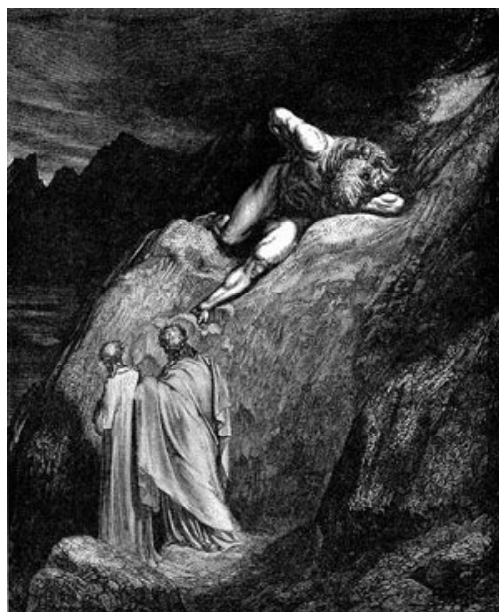
迷宮のなかは単純な煉瓦積みで仕切られていた。面白いことに壁の中央には、ところどころに覗き窓のような隙間があり、壁ひとつ隔てた通路が断片的に見える。通路の広さは両手を伸ばして壁に両手がかかるほどで、指に触れる煉瓦の表面は冷たく、僅かに湿っている。迷路のなかにはひやりとして、壁がおぼろに見える程度の明るさだった。おそらくどこかの天井の煉瓦の隙間から微かな光が差し込む仕掛けらしい。直接に外光を見ることはできないが、歩行するのに困難は覚えない。しかし、すぐに正面は行き止まりになり、通路は直角に右に曲がる。それもほどなく反対の左に折れる。そして、幾度も右折左折を繰り返すうちに、あなたは最初の入り口がどちらにあったのか、この迷路に本当の出口があるのかも分からなくなる。

おぼろな闇のなかで、幾重にも折り重なった壁の奥から、くぐもった獣の叫びが聞こえてくる。ミノソスの迷宮に棲むという牛頭の怪物ミノタウロスの神話が脳裏を過ぎる。迷宮の奥底に隠れ、迷い込んだ若者を引き裂いて殺す怪物の伝説である。この怪物に出会うことなく迷宮を出ることができれば、勇者の証になるのだと言う。しかし、そもそも、迷宮のなかで追跡劇などが成立するのだろうか。

あなたは注意を前方に集中し、耳をそばだてながら、慎重に前に進む。ときどき、怪物の叫びとおぼしい音が聞こえる。それはあなたが右へ、左へと折り曲がりつつ進むにつれ、前方から、後方から、左右から、或いはどのように反響したのか、四方から同時に響いてくる。怪物の声はもの憂く、獲物の前でじゃれる猫の喉声のように、長く尾をひいて殷々と木霊する。

煉瓦の壁の隙間に、黄色の動くものが見える。間近でうなり声が聞こえるが、次の曲がり角で物音が遠ざかる。また、しばらくすると壁の向こう側に荒い鼻息が聞こえ、尖った角が見え隠れする。そして、遠ざかる。これが何度か繰り返され、一度は闇のなかに琥珀色に光る怪物の両目を見た気がする。今やその獣の声は明白な敵意をむき出しにしており、ときおり怪物の熱い吐息を背筋に感じるような気がする。

あなたは迷路のなかのジグザグの通路を走り抜けな



がら、出口を求めて進む。怪物のあげる怒りの咆哮は、近づき、また遠ざかる。やがて、薄暗がりの通路から、突然、天井の高い広間に出る。広間は四角い壁で囲まれ、どの壁の中央にも変哲のない通路の入り口が開いている。あなたの選択肢は四つしかない。どれかの通路を選ばなければ、この迷路の中心で朽ち果ててしまうだろう。あなたは広間の内部を子細に点検しながら、この先進むべき通路を選ぶ。そのとき見えたものを覚えておきなさい。

あなたは〇〇の通路を選んだ。

あなたは再び入り組んだ通路を進み始める。今は怪物の気配はないが、どこかで突然出会い頭にぶつかるかもしれない。そのときは何を言い、何をすれば良いのだろうか。

ある角を曲がった瞬間に正面に巨大な影がある。その影は腰布を巻いただけの裸体の男性像で、頭部は異様に大きく剛毛に覆われた頭からは2本の角が伸びていた。ほとんど目前に出現した怪物の姿にあなたは話かけねばならない。

ミノタウロスはあなたに何をしたか。

ミノタウロスはあなたに何を話しかけたか。

怪物と対面し、十分な対話を行ったのち、それを押しつけて進みなさい。怪物の背後にはこれまでとは作りの違う門がある。その木製の扉を押し開けて、迷路から出なさい。あなたが足を踏み出すと、そこには床がなく、闇の空に吸い込まれるように落下していく。濃い雲のなかを突き抜けて、あなたは落ちていく。

これから先は帰還へのプロセスだ。あなたの身体は、下方に徐々に高度を落としていく。雲の切れ間に茶色の地上が見え隠れし、その光景はすぐに町や川の連なるパノラマへと変貌する。あなたは町の特定のパターンを見分けることができる。それは今住んでいる場所、あなたの肉体が靈魂の帰還を待ちわびている家のある土地である。世界は急速に身近になり、自宅の屋根かベランダの上にあなたはそっと着地する。

あなたのイメージの身体は屋根などを突き抜け、肉体に帰還する。

ゆっくりと目を開けなさい。身体を動かし、血肉の感覚を把握したら、魔術記録をつけなさい。

(2) 第4の技法：みずうみ

次のイメージが心のなかを流れるにまかせなさい。イメージが浮んでこなかったら、ひたすらその様子を想像しなさい。

あなたは空気の薄い高原の岸辺を歩いている。青というより、群青に近い濃い空の下、厳しい寒気が風となって肌を切る。足の赴く方向には、淡い緑色の浮き草に覆われた湖が広がっている。浮き草は絡み合っただけの島のような茂みを作り、草のない部分は碧色の不透明な水面が顔を覗かせていた。ときおり、水面下の生き物が動くのか細波がたち、浮き草の島々に反射して複雑な波紋を作り出す。

あなたの前には、岸辺に半ば引き上げられた草を編んで作った小舟がある。その上に飛び乗ると、弾力的な反発を感じる足の下で、舟はぐいと動き、湖に乗り出した。もちろん、オールもパドルもない。しかし、舟は何か吸い寄せられるように進んでいく。草で編んだ小舟は、木製のカヌーとは違ってぐねぐねと動く不安定な乗り物だ。頭と腰を下ろした中央部と後ろの部分がワイヤーを降ったときのように、順番に上下動する。すぐに身体を傾斜させると進行方向が変化するのが分かった。右へ身体を倒すと、草の船縁が右の水面を洗うようにして、舟は右へ回転する。左へ倒せば左回頭する。身体を前に傾けると早さが増し、後ろに傾けると速度が減るようだ。しかし、思いきり後ろに身体をそらせても、舟は止まらないのだが。

しばらく、草の浮島と浮島の間にできた水路を、歩くような速度で進んでみる。岸辺は幾度か曲がると見えなくなった。浮島は良く観察すると非常にゆっくりしたペースで、浮き沈みの振動を繰り返している。そして、風か、その他の力に押されて、相互にぶつかりながら、ゆっくりと動き回っている。従って、浮島の草の岸辺で形作られた水路は一瞬も同じ形ではありえない。あ

あなたの辿ってきた水の道は、次の瞬間には閉ざされている。あなたは、ゆっくりと認識しはじめる。これも水と水草の形作る一種の迷路なのだ。それも常に変動し、行く手の見えない生きた迷路なのである。

小舟は依然として何かに押されるように進んでいく。あなたは前方から現れる草の塊を左右に避けながら、何かの気配をさぐっている。それは音でも、色や形でもない、不思議なシグナルだ。「圧力」というのが最も近いかもしれない。不安感も前後左右の水平方向ではなく、下から、湖の底から忍び寄ってくる。ときおり不規則に舟が揺れる。そんなときは決まって周囲の水の色が、雲ひとつない空の下で、色濃くくすむのである。あたかも鯨のような巨大な水中生物が小舟の真下を通過したかのように。

さらに、遠くの浮島が突然、消滅することがある。あたかも、真下から巨大な触手で湖底に引き込まれたように。そんなときは水面の波紋はいっそう複雑に激しく波立つのである。

何度か姿の見えない鳥が金属質の叫び声をあげた。風の向きによって、その鳴き声が突然かすれて消えることがある。それとも、何か巨大な嘴が、空飛ぶ生き物をくわえ採ったのだろうか。

突如、あなたの前に大きな岩が現れた。それは、浮き草のない淡緑色の水面の中央に巨大な拳を半分だけ突き出したように聳えている。ごつごつした黒い岩肌に、何かさだかではない生き物の顔のようなものが幾つも掘込まれている。岩の廻りを左廻りに回りなさい。表面に彫刻された風化しきった像は、人間とも動物ともつかず、怪物めいた形相であなたを威嚇する。岩の上部は平らになっているようだが、水面に張り付いたあなたの視点からは隠されている。その見えざる頂上から一筋の煙があがっていた。香を焚くような鼻につく臭いがする。もはや誰にも崇拜されない古代の神に供物でも捧げているのだろうか。

視線を湖面に転ずると、岩を中心に八方に黒い筋が走っている。それが湖底を走る石の列なのか、何か得体の知れない生き物の触手なのか知るすべはない。もともと不透明な湖水を通して見ている上に、草の小舟が通ったせいで水面が揺れ、湖底の幾本もの黒い筋は生き物のように蠢いて見えるからだ。もちろん、無生物だという保証もない。

岩を一周すると、再び浮き草のなかを進み続ける。先ほどよりも浮き草の上下動が激しいようだ。それも一定の方向に動いていくように感じる。左の浮き草の島が後方から前方に急速に盛り上がっていく。あたかも巨大な生物が真下を通過したかのように。

水面の動揺は、近づき、また、遠ざかる。

一時、静かになったと思うと、背後に大きな水音がした。その方角を肩越しに振り向くと、遠くの浮き草の島がまるごと宙を飛んでいる。薄緑色の浮き草が袋状の水中茎の束として舞うなかに、黒々とした鞭のようにしなやかなものが、一瞬、垣間見えては、水飛沫のなかに消える。空気を切って伸び縮みした生き物のような動きが、あなたの目に焼き付く。

次に浮き草や、ゴミのない水面に流されたとき、あなたは半透明の水面下に巨大な影を見る。左の水面の間近に見た水中の岩のようなものは、もとより形も大きさも定かではないが、水面に露出していない岩だとすれば、大層な代物であり、それが何らかの巨大生物だとしたら、海に棲む鯨より大きいかもしれない。

あなたの周りの水面がざわつき始めてきた。同時に草の小舟は飛ぶように走り始める。前方には、揺れる浮島の間には岸辺が見え隠れしている。

あなたの周囲の草の塊が、何かに引き込まれたように水中に消え始める。波立つ水面に黒い筋が幾度となく走り、あなたを威嚇するように小舟に近づき、また、遠ざかる。

前方の浮き草が攪き払われたように消えて、岸辺まで続く幅の広い水路ができた。

その水路の中央に半球状の小屋ほどもある物体が浮上した。その濃緑色の表面には銀色に輝く鱗が斜めに筋をつけたように走り、隆起した下部の突起がめくれあがると黄金色の虹彩のない眼



球がふたつ現れた。そして、その頭部から離れた場所にあなたを囲むようにして、吸盤のついた触手が多数浮いてきた。怪物の触手と頭部に挟まれた形で、あなたの舟は停止した。怪物は北海に棲むという蛸の化身クラークンの眷属である。この異様な怪物にあなたは話かけねばならない。

クラークンはあなたに何をしたか。
クラークンはあなたに何を話しかけたか。

怪物と対面し、十分な対話を行ったのち、それを押しつけて進みなさい。怪物の背後には岸边まで安全な水路がある。あなたの舟が岸边に乗り上げ、乾いた土の上に足を踏み出すと、その地面は突如抜け落ち、闇の空に吸い込まれるように落下していく。濃い雲のなかを突き抜けて、あなたは落ちていく。

これから先は帰還へのプロセスだ。あなたの身体は、下方に徐々に高度を落としていく。雲の切れ間に茶色の地上が見え隠れし、その光景はすぐに町や川の連なるパノラマへと変貌する。あなたは町の特定のパターンを見分けることができる。それは今住んでいる場所、あなたの肉体が靈魂の帰還を待ちわびている家のある土地である。世界は急速に身近になり、自宅の屋根かベランダの上にはあなたはそっと着地する。

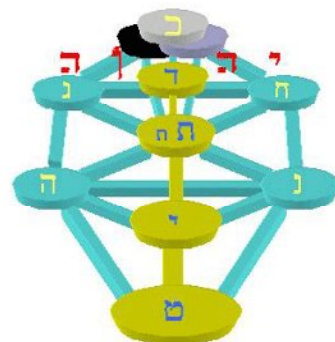
あなたのイメージの身体は屋根などを突き抜け、肉体に帰還する。
ゆっくりと目を開けなさい。身体を動かし、血肉の感覚を把握したら、魔術記録をつけなさい。

9 メルカバによる下降

(1) アストラル神殿の構造

この道行きにおいては、マルクト神殿から出発し、イエソド神殿を通過し、ティファレト神殿に至る。ティファレトにおいて、印章を利用し、至高の3幅対（ケテル～コクマー～ビナー）に至る中間点であるダアスの広間において、メルカバの降臨を見る。

3幅対が集約しているため、第11、第12及び第14の小径は隠れ、ケセド～ゲブラー線より上位の小径は中央の柱に収束していく。その中にダアスが仮想セフィラとして出現する。



(2) 魔術の教理及び技法的側面

a 宮殿の門番 (Guard Angels)

門番の姿は典型的な武装天使の姿である。個々の天使名によるテレスマの解析は必要ない。

天使長カツピエルはメルカバに下降するに相応しくない者を殺戮するため剣を履き、弓を携えている。胴着は白無垢の単衣であり、鎧は身につけていない。腰衣は同じく白無垢のキルトのような素材である。ドゥミエルや、他の天使も同様に武装している。かれらの翼は、猛禽類が地上にあるときのように折り畳まれている。無帽の頭上には光輪が射す。

天使の臨在を感じる時は、作為するよりも、その役割を想起されたい。

ユダヤ教では審判の天使は、靈魂を切り刻み2度と再生しないようにギザギザの歯のついた剣を抜き控える。その刀身からは冷たい炎が吹き出し、刃の上を露が滴る。



b メルカバ幻視 (Zefiyat ha-Merkabah)

ダアスの広間において幻視するメルカバは、『第3エノク書』にあるように多数の天使存在が複合して支える靈的乗物である。しかし、神秘家ではない余人には、個々の天使を識別することは不可能に近く。メルカバ全体が、回転する輝き、或いは煌めく翼の海のように見えるだろう。

儀式の最終段階において見える正四面体を結合させたメルカバ祭壇は、半透明な幾何学図形である。

それは上下の頂点を結ぶ垂直軸を中心に、右回り、または、左回りに回転する。右回りに回転するときは、「内方」、つまり、第7宮殿の栄光の玉座に向け「下降」し、左回りに回転するときは、「外方」、つまり、宮殿からの帰還の方向に「上昇」する。

(3) メルカバによる下降の実践

- a 小五芒星の追儼儀式
- b 七の小封印
- c トーラーの宰相の召喚

「わが声を聞け。おお、主よ。

汝は、生成（ゲネシス）にして、始原（アルケ）なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝の真実の子、ShQDHVZIH（サクドゥザー）の祈りを聞き賜え。
汝が力を貸し賜え。
われは汝が光のなかで再生せんとす。
われは汝が光のなかで完成せんとす。
汝が天使ARPDS（アルパデス）は語れり。
三つの御名を唱えることなく、メルカバに至るなかれ。
そは、次なる名なり。

SDIR ThINRI AI (サディル ティンリ アイ)
IBIA BIHV SVVTz (イバイアー ビホー スーツ)
DVP RVP DChM (ドゥパ ルアパ ダカム)」

「汝は、われらの父にして、われらの母なり。
われらの栄光にして、われらの輝ける自己が顕現する。
そは本然の性、始原の光体なり。」

「わが声を聞け。おお、主よ。

汝は、生成（ゲネシス）にして、始原（アルケ）なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝が律法の宰相ShR HThVRH（サル ハ・トーラ）は語れり。
三つの御名を唱えることなく、メルカバに至るなかれ。
そは、次なる名なり。

ZTz TITz ZRZIAL (ザッツ ティズ ザルジエル)
ThITh ThVPILTI RBTh (ティス トゥピルティ ラブス)
IPA ARChR ZIOA OIZVZ
(ヤパー アルカル ジアー アイザズ)」

「汝は、彗星より火を借り、光の戦を率いる者なり。
われらが足下に大地が見え、また天も見えるなり。
そは本然の性、始原の光体なり。」

「わが声を聞け。おお、主よ。

汝は、生成（ゲネシス）にして、始原（アルケ）なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝が顕現の天使MLAK HPNIM（マラキ ハ・パニム）は語れり。
三つの言葉を唱えることなく、メルカバに至るなかれ。
そは、次なる名なり。

GLI AII (グライ アイイー)

ARDR IHAL (アルダル ヤホエル)
ZK BBIBA (ザク ババイバ)」

「汝は、夜明けの薄明にして、黄昏の薄明なり。
われらが影のはずれに来たとき、太陽はわれらの頭上にあり。
そは本然の性、始原の光体なり。」

「わが声を聞け。おお、主よ。
汝は、生成(ゲネシス)にして、始原(アルケ)なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝がメルカバの車輪GLGLI HMRKBH (ギルグリ ハ・メルカバ)は、
玉座の前で歌えり。
三つの言葉を唱えることなく、メルカバに至るなかれ。
そは、次なる名なり。
HTz PZIPA (ハツ パジパ)
HP IAV (ハパ イアウ)
GHVA ShBIBA (ガホア セバイバ)」

「汝は、月の秘薬たる光にして、太陽の秘薬たる光の光なり。
われらが玄妙なる物質の心的王国を越えるとき約束は成就せん。
そは本然の性、始原の光体なり。」

「汝は、われらが主にして王、至高至聖なる霊なり。
汝、燦然たる神の光を身に帯びたる者よ。
汝は聖霊の天の父にして、宇宙の母なり、しかして、心の天の子なり。
われらは汝を召喚し、汝に満たされんとす。
汝、隠れたる者、HDIRIRVM (ハディリルム) !
この血に降下し賜え。
汝、本性の知らざれし者、AL RVZII IVI (エル ルズィー イヨー) !
この肉に降下し賜え。
汝、かくのごとき者、HGGBVB IH IHV (ハググブブ ヤー ヤオー) !
この骨に降下し賜え。
IHVS hH (ヨド・ヘー・ヴァウ・シン・ヘー)
われらは戴冠せる王、天と地の支配者とならん。
IHS hVH (ヨド・ヘー・シン・ヴァウ・ヘー)
われらは万軍の将、天と地の支配者とならん。」

頭上に覆い被さるよう出現する巨大な天使の像がウシャブティを呑み込む。アケファロスの顔のないオーラに、トーラーの宰相のテレズマ的姿形が融合し、再形成され、あなたの霊的外形が急激に変化する。

宣言する。

「われは、聖なる五つの文字に表象される無敵の一者なり。
五界を結ぶは、われなり。
諸天界へ上昇せるは、われなり。」

d マルクト神殿から諸天界への上昇

東を向き、柱を越えて、至聖所に到る階段を上る。仕切り壁の上にある三つの扉（小径）のうち、中央の扉に向かう。思念の杖をあげ、月の召喚のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。銀色の六芒星が扉の上に輝くと、扉はタロットの「世界」の絵札に変わった。

扉を抜け、第32の小径に入る。扉を抜ける瞬間に、四隅の四大のケルビムの像が首を曲げて、通過しようとする貴方を見るのが感じとれる。

この扉は、立体的奥行きのある3次元の像であり、女神が身体に巻き付けたカフの字の形に折れた薄衣は、彼女の背後から吹く微風にはためき揺れている。女神は不思議な微笑みを浮かべている。あなたは半透明な女性の立体像の中を通り抜け、小径に入る。

小径に入った瞬間に、全身を浮遊感が覆い。凄まじい勢いで、星降る宇宙空間を上昇する自分を感じる。紫色に近い暗黒の星空のなかに、手に触れるほど間近に巨大な満月がある。

巨大な半球から、その全貌が見えないほど視野一杯に広がり、クレーターの形が見分けられるほど月面に肉薄したかと思うと、あなたは急上昇し、月の表面をかすめるように焼けただれた岩肌の上空を飛翔する。前方の月平線が急速に丸くなり、月の反対側の宇宙が見え始めると、暗黒の空間に虹の七色を宿したオーロラが、その揺れる帳を全周に広げて出現した。

月を後にしたあなたは、オーロラの形をしたパロケスに突入した。

強い香が匂う。貴方は全身を虹の色彩で包まれ、揺らめく帳を1枚1枚、突き抜けていく。その度に光体に軽い衝撃が走る。その振動を7回数えたときパロケスを完全に通過した。

薄い帳を通過する度に、あなたは自分の光体から地上的な重いものが薄皮をむくように剥離していくのを感じる。

次に出現したのは、黄金の球体、太陽である。

プロミネンスが紅蓮の炎をあげる太陽面が手にとるように見える。

星空の一角に太陽の召喚のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。銀色の六芒星が闇のなかに輝くと、空間を切り裂くようにタロットの「節制」の絵札に変わった。

宇宙空間のただなかで方向を定め、その透明な扉に潜り込み、第25の小径に入る。前に進むと、右側から噴火する火山の熱と大地の乾いた固さを、左側から水の冷たさと湿り気を感じる。

あなたは虹の矢の径をとおり、半透明な女性の立体像の中を通り抜け、次の小径に入る。

e ティファレット神殿と宮殿の門番

ティファレット神殿の内部は正八角形の床と化粧板を貼った丸天井、黄金のパネルで埋められた側面に開く八つの扉から成り立っていた。

あなたはその西側の扉から神殿に入った。神殿の少し高くなった中央部には四つの黄金の御座が東西南北を向いて置いてあり、その内側に天井まで届く大理石の柱と磨いた祭壇が立っている。神殿全体は天井の6本の灯火が発する淡い黄金色の照明で照らされていた。

同じく大理石の床を踏み締めて、あなたは神殿内のしかるべき位置につく。

祭壇の西に行き、白大理石の祭壇に向かい、祭壇の上の布を被った盃を避けて、笏で6回ノックする。

11 11 11

「我らは、《魂の暗き夜》を越え、ここ第6の小径、ティファレトに到れり。
天球における座はシェメツシュ、太陽の球なり。
第6の小径は《媒介的影響力の知性》と呼ばれる。その中で流出の流れは倍加し、
かの影響力は総ての至福の貯水池に流れ込み、あらゆる流れは自らひとつになる。」

祭壇の上の6本の蝋燭が灯る。同時に乳香の香りが漂い始める。
剣を掲げると天井の燭台が黄金の眩い光線を放ち、参会者の法衣を豪華な輝きで浮き上がらせた。

「第6の小径の体験は《十字架の密儀》なり。
死して復活せる神々の伝説と、その表象せる自然の周期に思いを馳せよ」

杖を掲げると、神殿の内部に微細な黄金の粒子が充満し、濃密な黄金の霧となって参会者の胸までを覆った。その金属の霧は聖名を振動させる声に共鳴して、神殿内部を反響する深い波動で満たす。

「ヤーヴェ・エロア・ヴァ・ダート。
顕現せる神よ。神の知識に礼拝する。アーメン」

祭壇の上から3枚の聖なる印章を取り上げ、祭壇を回って東の壁に行く。

東の扉の前に立ち、杖で、土星の召喚のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

銀色の六芒星が扉の上に輝くと、扉の前に8人の天使が出現する。右側に4人、左側に4人である。

右翼の最も前方にいる天使に向き直る。

天使は剣を抜き払い右手に構えている。

その剣から発する稲妻が、あなたの目を奪い眩ませる。稲妻は、あなたの胴体の直前で炸裂し、静電気で肌がちりちりとする。空気が焼け、オゾンの臭いがする。あなたの目は連続する電光で半ば眩まされた状態だ。威嚇する剣の「破壊を！ 寂滅を！」をという絶えざる警告は、破滅の天使に対峙する恐怖を再認識させる。



「汝、第6宮殿の門の宰相カツピエルよ。
メルカバに下降する者を滅ぼす者よ。
メルカバに下降する者を滅ぼさざる者よ。
わが手にある聖なる印章を見よ。」

あなたはザフリエル (זְהַרְיָאֵל) の第一の印章を示す。そして、すばやく第2の印章を示す。

印章を確認した天使長カツピエルは、稲妻と雷鳴を放つ剣を鞘に納める。

左翼の最も前方にいる天使に向き直る。



「汝、第6宮殿の門の宰相ドゥミエルよ。
アラヴォートに響きわたる沈黙の声を宰領する者よ。
沈黙の天使、ドゥム・エルよ。
わが手にある聖なる印章を見よ。」



あなたはボロニヤー (ברוניה) の印章を示す。

それを確認した天使長ドゥミエルの合図を受け、天使長カツピエルが弓を引き絞り、あなたの頭上に矢を放った。大風が巻き起こり、軍団の角笛の音がわき上がる。前方の扉の奥からメルカバの放つ輝きが顕れた。



天使長ドゥミエルは右手をあなたの方に振ると、目に見えない贈り物を、あなたの胸に授ける。それは、あなたに対するメルカバへの認証である。あなたは門をくぐる。

f ダアスの広間への入場

門の彼方にはダアスの広間があった。ダアスの広間は、非在の広間である。

それは「生命の木」の図像に引かれた仮想の小径、いわゆる「隠された小径」のひとつである。別の視点を用いると「知識の小径」は「善と悪の知識の木」が「生命の木」と交わる場所であり、一刹那の「御座の宝玉」の顕現である。

あなたの前に、見渡す限りの白銀の輝きが広がっている。真冬の太陽に照り映える湖の面のよう、渦巻く光が湧きかえっている。

目映い光線に目をくらませながら、上空を見上げると鏡写しのように白銀の輝きが広がっている。上下の光の氾濫は、大いなる海のようにでもあり、冷たく燃える炎の壁のようにもある。

どこからともなく天使の声が聞こえる。

「ラキアとラキアの間に水がある。

水と水の間に火がある。

火と火の間に水がある。

水と水の間に火と拝礼と水がある。」

しかし、これを見て「水だ、水だ。」と叫んではいけない。

広間の床と天井の大理石の輝きは、天界の第6宮殿の反映である。真っ直ぐに横切りなさい。前方に青銅色の輝きがある。

g メルカバの臨場

ダース神殿の奥に光輝くものがあった。

その青銅のように輝くものは、不思議な姿をしていた。無数の翼と手と足が見えた。その集合体は複雑な動きを見せ、一瞬たりとも静止していなかったが、全体の中心に光の強い部分があり、それは相対的に停止していた。生き物の四肢が蠢くなかに、火の粉が舞い踊り、その周囲を小さな稲妻が取り巻いていた。この幻惑されるような生き物の連なりのなかに、4種類の顔が見える。つまり、獅子の顔、牡牛の顔、鷲の顔、そして人間の顔である。

そして、生き物の下には四つの車輪があった。車輪は静止したり、回転したりを繰り返している。静止したときは、車輪が複数の同心円状の輪で構成され、それぞれの輪にはびっしりと目が満たされていた。

生き物の上には、蒼穹の連なりが見えた。その巨大な広がり、同様に巨大な翼によって支えられていた。

蒼穹のさらに上にサファイヤのように輝く何者かがあったが、眩しすぎて見えない。



これらの全体がひとつのメルカバである。

あなたが見ているのは、あなた自身のメルカバである。

天使長ドゥミエルが訓戒する。

「われ汝に宣言し、警告する。

次の二つの資質をもつことなくば、

メルカバに下降せんとするものは、

メルカバに下降すること能わず。

その一は、書かれたトーラーと口伝のトーラーを慎重に学んだことである。

その二は、シナイ山でモーシェが持ち帰りし主の命令を厳密に守ることである。」

ドゥミエルは、次にあなたの名前と学習の進展度を赤いインクで巻物に記し、メルカバの生き物の上にある蒼穹の柱にかけた。

その瞬間にメルカバは姿を変えた。

車輪は急速に回転し、その姿が見えなくなる。生き物の四肢は翼の奥に引き込まれ、四種類の顔が溶け合い翼の奥に隠れる。生き物の姿で見えるのは、無数の回転する翼だけとなった。

あなたの名前と学習度が記された柱を含む蒼穹の天蓋は、三つに折りたたまれ、その中心に黄金の三角形が出現した。

三角形の奥に門が開き、第七宮殿への通路が出現する。神聖名ヤーが瞬時、浮かびあがる。

しかし、門が開いたのは一瞬であった。



メルカバの翼が折りたたまれ、中央の門が閉じる。メルカバは急速に変形し、あなたの前に上向きの正四面体と下向きの正四面体が合体した立体六芒星が出現した。

あなたの個人的なメルカバは、万人の象徴たるメルカバに変容した。



h 地上への帰還

地上への帰還を強く念じる。

i 小五芒星の追儼儀式

j 記 録

第11ヶ月目の瞑想 —神への祈り—

第3章においては瞑想の分類のひとつとして、「祈り」をあげた。しかし、カバラにおける「祈り」とはそれ自体が完成された秘義の体系である。ユダヤ教の日々の祈り、「アミダー」により、祈禱者は作りあげようとする「祈り」の一部分になった姿を見いだす。

パール・シエム・トブは、祈りの段階を次のように位置づけた。

アツィルト界	アミダー
ブリアー界	シエマとその祝福
イエツィラー界	聖書の詩歌及び賛歌
アッシャー界	供儀の読書
物質世界	奉仕の一部分

祈りとは神に至る門である。従って、自分の悩み事を神に祈るなどラビ シエム・トブは言う。人間は神の高き光の一部であるから、無私の祈りは神に届くであろう。この概念をある種の願望達成システムと混同してはいけない。人間の欲望はイエツィラー界の下層で働く。しかし、真の祈りは上記に示したように、アツィルト界まで届くのだ。

かれの示した祈りは、祈禱文を機械的に読むものではない。心を燃えあがらせ、神の高き火花に届く道をつくることである。『律法の書』を読み、その文字に光を見なさいとも言う。そのため、この章の課題は『律法の書』から取られている。それを口に出して唱える必要はない。その言葉の示す情景を強く思い浮かべ、心を高揚させなさい。

ラビ シエム・トブは言う。祈りのなかで、愛や情欲を感じたらそれは「愛の宇宙」から来たのである。恐れを感じたら、「恐怖の宇宙」から届いたものだ。虚栄心を感じたら「美の宇宙」からだ。これらの感情の振幅は、「殻の宇宙」から届いた波動であるが、愛欲は神への無私の愛を思い、物質的恐怖は神への畏れを思い、虚栄心は神への謙譲を思うことで、それぞれの殻の世界へ返すことができる。ひたすら、神の高き座に思いを馳せて、心を高きに保ちなさい。

各週ごとに、次の『聖書』の文章を鍵に祈りなさい。

第1週：「生命の木に至る道を守るために、回転する剣」（『創世記』3章24）

第2週：「主はカインに言われた、汝の弟アベルはどこにいるのか」
（『創世記』4章9）

第3週：「鳩はノアのもとに帰り、口にオリーブの葉をくわえていた。」
（『創世記』8章11）

第4週：「おまえの名はイスラエルと呼ばれる。
神と人々とともに戦って勝ったからだ。」
（『創世記』32章29）

今月の読書

今月の学習の参考になる著作は、以下のとおりである。

1 必読図書

今月の必読図書はない。

2 推薦図書

マイケル・ハーナー 『シャーマンへの道』 平河出版社、1989年。

マイケル・タルボット 『投影された宇宙』 春秋社、2005年。

ロジャー・ウォルシュ 『シャーマニズムの精神人類学』 春秋社、1996年。

Knight, Gareth. The Dweller on the Threshold.

上記、ガレス・ナイトの文書は下記サイトから入手できる。

<http://www.innerlight.org.uk/journals/Vol22No4/dweller.pdf>

第11ヶ月目の課題

この課題は、今月の作業が終了した後に記入しなさい。記入した課題は魔法日記のコピーと一緒に提出すること。

- 1 あなたは無意識の機能とは何だと考えるか。
- 2 自分の身近な例として、アルテル・エゴの出現した状況を説明しなさい。
- 3 ボームの「内在秩序」論についてどう思うか。
- 4 シャーマンの特殊な意識状態とはどんなものか。
- 5 第1の技法と第2の技法を实践して何を感じたか。顕著なものを述べなさい。
- 6 自分の身近な例として、二つの境界の住人の出現した状況を説明しなさい。
- 7 第3の技法と第4の技法を实践して何を感じたか。顕著なものを述べなさい。